

325

304



始





著者 譯者

者の完全

大正
7. 7. 22
内交

325-304

基督者の完全

是は一七二五年以降一七七七年に涉りてジョン・ウ
エスレー氏が信じ又宣傳せし所なり。

以下此書中に述べんと志す所は、過去多年月を通じ、自分が導かれて、遂に基督者完全聖の教理を懐抱するに至りし階段を、平易明瞭に説明せんとするに在る。これは、凡ての眞理をイエスの教へられしまゝに知らむと欲する眞面目なる人々の爲のものであつて、夫は斯かる人丈けが此種の問題に心を致す人々であるが、是等の人々に對し、自分は赤裸々に事相其儘を告白し、一段、一段と進むに従ひ、如何に自分が考へたか、又何故左様考へたかの理由を、努めて平易に

是は一七二五年以降一七七七年に涉りてジョン・ウ
エスレー氏が信じ又宣傳せし所なり。

基督教興文協會の事業は、日本の基督
信徒及び未だ基督教を信ぜざる人々の需
要に適したる基督教文學の著作及頒布に
あり。本協會は日本に在る基督教ミッシ
ヨンの同盟を代表せるが故に公同的精神
を以て立てるものなり。されば本協會の
會員及び維持者は必ずしも本協會に於て
發行せる書籍に現はれたるすべての意見
に同意せるものと認むべからず。



説明したのである。

二 一七二五年、自分が二十三歳の時、監督テラー氏の著『聖なる生と死とに關する規則及び訓練』と題する書籍に接した。此書を調べて別けても意志の聖潔と云ふ事に著るしく心を惹かれた、其結果直ちに、自分は我全生活、即ち、我凡ての思考我言語、又我行為を神に奉獻せんと決心した、此時、徹底的に説得された一事は必竟我生涯の全部（唯だ一部でなく）を神に獻げるか、又は自分に獻げるか（これは所詮悪魔に獻ぐる事になるが）其處に中間の生活と云ふものを許さないと云ふ事であつた。

凡そ眞面目なる人にして此事を疑ひ神に仕ふると惡に仕ふるとの中間生活と云ふものを發見する事は出來まい。

三 一七二六年、自分はケムピス氏の『基督者の龜鑑』といふ書物内の宗教即ち心情の宗教の性質及び範圍といふ事が、未だ

を以て示された。此時自分の悟つた事は、假令我が全生涯を神に捧ぐとも（是が爲し得らるゝと定め又此状態に止まると假定しても）若し、我心情、然り、我全心情を捧げないならば、何の益する所があらうかと云ふ事であつた。

又意志の單純と愛情の純潔、我が凡ての言行に於ける一の目的、我凡ての慾望を御する一の願望、これ實に、神の山に登る靈魂の爲には無くてならぬ羽翼であると悟つた。

四 其後一兩年を経て、ロー氏の『基督者の完聖』及『嚴肅なる召命』の二書を手にした、是等の書物に由つて尙ほ一層人が半分だけ基督者となる事の全然不能なる事を明白に納得せしめられた、而して神の恵みによつて（此事に就ては神の恵による事の全然必要なる事を深く感じたが）（我全靈全身全資産を神に奉獻せんと決心した）。

思慮ある人である限り、是は餘り深く入り過ぎる事だとは言ひ得まい。果して

是は一七二五年以降一七七七年に涉りてジョン・ウ
エスレー氏が信じ又宣傳せし所なり

然らば、御自身を我儕に與へて下さつた御方に對して我儕は自分即ち我全所有、我全人格を捧ぐる事より以下では相濟むまい。

五 一七二九年、自分は聖書を眞理の唯一の標準、又純宗教の唯一の軌範として讀み且つ探究する事を始めた。爾來、愈々益々鮮明にされた一事は、キリストの心を有つと云ふ事と、キリストの歩み給ひし如く歩むといふ事との必要缺くべからざるものなる事であつて、夫れも唯一部でなく、キリストの保有し給ひし總ての御心と、主が歩み給ひし儘の歩みを爲すの意であつて、多くの點に於てとか、又大様似て居るとか言ふのでなく、凡ての點に於て然るべきであると悟つた。而して之れが、當時自分が宗教といふものを普通批判する燈火であつた、又之れが、キリストに従はんとする者、即ち内に於ても外に於ても、主に倣ひ上らんとする者の着すべき制服だと心得た。従つて自分自身は勿論他の人の經驗に對する規範たる此規則を曲ぐる事、將た又我儕の偉大なる模範者に倣ふに少しでも不似合なる事をして容して置くと云ふ事位を恐るべきものは無いと考へた。

「心情の割禮」を題してオツクスフォード大學に於て爲せる説教

六一七三三年一月一日大學の爲に『心情の割禮』と題して、聖マリヤ教會堂に於て説教をしたが、左は其大要である。

『聖經に所謂聖潔とは、靈魂の常習的傾向である。其内容は罪より潔められる事、即ち肉と靈との凡ての汚瀆より潔めらるゝ事、又其結果として、キリスト、イエスの備へ給ひし所の諸徳が賦與され、斯くして其人格が改造され、即ち我儕の心の姿が改造されて、「天に在ます父の完全なるが如く完全にせられる」事である。』此説教に於て自分は云つた。『愛は律法を全うするものにして、戒律の極致である。』愛は「第一にして大なる」命令であるのみならず、凡ての戒めの括である。

「凡そ公義なる事、凡そ清潔なる事、若し其處に徳あり、其處に譽ありとするならば、是等は皆此一の言、即ち愛といふ言の内に包括される。此處に完全があり、榮光があり、又幸福があるのである。天地の大法は「なんぢ心を盡し、精神を盡し、意を盡し、力を盡し主なる爾の神を愛すべし」との是れである。故に卿等の有すべき唯一最高の目標は唯完全なる善であらねばならぬ。卿等は一つの事を他の目的なしに願望せねばならぬ、即ち全ての至てに在し給ふ方の満足を願望せねばならぬ。また卿等が靈魂に對して推奨すべき唯一の幸福とは、靈魂の造り主なる御方に一致する事、即ち父及び子と同心となり、又同じ御靈の内に主に結びつく、此事であらねばならぬ。更に卿等の終り迄追求すべき唯一の計畫は、常に、又永久に、神よりの喜びを求むるといふ事であつて、假令他の事を望むとするも其の事は此の目的を達するに役立つものでなければならぬ。又被造物を愛するに、遂に夫れが造物主を愛するの愛に到達し、且つ此事が卿等の取る凡ての歩調

に於て目指すべき最も榮光ある標的であらねばならぬ。如何なる愛情も、思想も、又言も、此一事に對しては從屬の地位に置くべきである。如何なる希望も、恐怖も、如何なる慾求も、忌避も、又何を考へ、語り行ふにも、卿等の存在の極致となり、又源泉たるべき者は、神に於ての幸福であらねばならぬ。』

此説教の結論に於て斯く言つた。『此處に完全なる律法の總計がある。夫れは心情の割禮と云ふ事である。卿等の靈をして其源なる神の御許に、其有する愛情の全列を掲げて歸らしめねばならぬ。神の我儕に望み給ふ聖物は是に外ならぬ。活ける心の献物、是れが主の選び給ひし唯一のものである。此献物は聖き愛の燭を以て、キリストを通じて永續的に神に捧げられねばならぬものである。随つて、被造物をして、此献物を分ち取らしめてはならぬ。神は嫉妬の神である。彼は玉座を他の者に分つ事を欲し給はぬ。彼は其政治に僭者の侵入を許し給はぬ。故に如何なる計畫も、如何なる希望も其終局に神を考へない者を我儕は有つてはなら

心情の割禮と題してオックスフォード大學に於て爲せる説教

ぬ。之れが嘗て地上にあり、死して今尚ほ我儕に語りつゝある神の子達の歩みし道であるが、彼等は云ふ、「主の名を榮め上る爲の外、活きる事を望んではならぬ、凡て卿等の思想、言語及び動作をして主の榮光の爲たらしめよ、又其靈を主に對する愛のみを以て充たしめ、斯くして彼の爲めならでは何物をも愛せぬ者とならねばならぬ。」心に潔き志望を抱き、我儕の凡ての行爲に於て主の榮光を顯す爲、不拔の注意を拂ふべし、「其時こそ、又其時に至りて初めて我儕の心がキリスト・イエスの内に在るものと同じものとなる。かくて我儕の心の凡ての動機、我儕の舌の凡ての言語、我儕の手の凡ての業、皆共に主を喜ばしめ上る爲に働き、又主に關りなきものは毫も追求せぬものとなるべし。同時に我儕を遣り給ひし主の爲に非ざるよりは、自分の意志を遂げんが爲に考へ、語り、又業を爲さぬ者となるであらう。」其の時にこそ、食ふにも、飲むにも其他何事を爲すにも、皆神の榮の爲に爲すに至るであらう。』

此處に注意を得たい一事は、此説教が、出版されたる我文章中の極初めに屬するものである事である、これは當時自分が宗教に對して有つてゐた見解であつた。自分は其時でも之を「完璧」と稱するに少しも躊躇しなかつた。而して此見解は今尚ほ自分が保有するものである。實質に於て少しの附加削減もなく、嘗て懷抱せしものは、今も尚ほ懷抱するのである。凡そ理解力ある人にして聖書を信ずる人ならば、之に對して何の故障を挟み得よう、聖書に全然矛盾する事なくして、此内の何物を否認する事が出来ようか。神の聖言による事なくして何ものを切詰める事が出来ようか。

一七三五年の終りに、亞米利加に向つて渡航せし迄、自分は自分の「メソヂスト」と嘲弄されつゝあつた青年紳士達と共に此情操に留まつて居た。其翌年であつたが、サバナに滞在在中左の句を認めた。

何者か、日の下にある者にして我心を分たんと主に對して競ふ者あるか、

心情の割禮と題してオックスフォード大學に於て爲せる説教

凡ての能力の主よ、願はくば之を離ち、唯獨り爾のみ我心を司り給へ。

一七三八年の初め方、米國より還りつゝありし時、我心は叫んだ。

汝の潔き愛の外、何物も我靈魂の内に留る事を赦し給はざれ。

我悦び、我財、又我冠なる主よ、願はくば汝の愛、全く我を領有し給はん事を。

異しき火(二心)我衷より遠けられ、我業、我言、我想凡てを愛たらしめ給はん

事を。

爾來、未だ嘗て之に反對の聲を聞かないのである。又實に誰が之に反對出來よ

うか。之れは唯獨り信ずる者の聲なるのみならず、眞實に覺醒されたる者皆が言

はんとする處ではあるまいか。其後今日迄自分の書いたもの、中にも決して之以

上強い、明瞭なものはないのである。

八 其次の八月、獨逸に於てアルザイット・グラトイン氏と長時間會談をした。

彼の經驗談を聞いた後、余は彼に信仰の確證に就て定義を書いて貰ひたいと頼ん

だが、之に對して、氏は左の如く書き送られた。

『キリストの血に憩ひ、堅く神に信賴し、且つ其恩寵を確信する事、又凡ての肉

の慾より解放され、一切の罪、内心の罪に至る迄も根絶され得たる心の最高の

安靜、清朗及び平和を云ふ。』

是は余が神の聖句より學びたる外、活きたる人より聽いた初めての説明である、

數年來(少數の友人達と共に)祈り求め期待しつゝあつた所のものであつた。

九 一七三九年、自分と弟とは、讃歌及び聖詩と題して一書を發刊した。其内に

我等の有する感想を強く、又卒直に告白してある。

自然の全潮流を轉じ、我儕の動作をして其源なる爾に還らしめ給へ。

主よ、爾の愛のみ我指導者にして、爾の榮光のみ我目的たらん事を。

然らば地は天に至る楷梯たるべく、諸感は其道を指示するものとならん、

又造られたる者凡ては主に歸すべく、我儕の享くる所悉な神なるべし。

又、

主よ爾の靈の能を以て我を装ひ給へ、

我は大なる聖名の下にあれば、我迷へる想、聖手によりて整へられ、汝こそ我

が凡ての業の終極たるべく、

又爾の愛我が凡ての日を守り給へば、我全業は爾を榮め上るにあらん。

又、

主よ我は爾を切に喘ぎ求め上る。願くは主は愛の強制もて、叫び求むる我魂

を全く爾の領有たる迄導き、

最も深き汝の海に浸し又其の無限に没せしめ給へ。

尚ほ又、

天のアダム、神の生命よ、願くは我質を變へて爾の如く成らしめ給へ。

來りて我靈に動き擴がり給へ。働きて其總てを充たしめ給へ。

此外尚ほ多數の句を紹介するは容易なれども、最早之にて充分なるべしと信ず。

疑もなく我等の情操は此處に顯はれてをる。

基督者の完全に就てウエスレー氏の書きし最初の小冊子

十 此問題に就て自分が書きし最初の小冊子は、當年の末の方發行された。之を讀まむとする人の僻見を拒ぐ爲に『メソヂスト信徒の性格』といふ不偏不黨の表題を掲げた。余は此内に完全なる基督者を叙述せんと努めた。初頁に「我既に獲たりといふにあらねど」と記して出したが、其一部を左に其儘採録する。

「メソヂスト信者とは、心を盡し、精神を盡し、意を盡し、力を盡し、主たる神を愛する者である。神は彼の心の喜びである、又彼の靈魂の望である。其靈は「主よ爾の外天に於て我誰をか有せん、又汝の外地に於て我誰をか望まん。あゝ我神

基督者完全に就てウエスレー氏の書きし最初の小冊子

我凡よ。汝は我心の力にして、我永遠の所有なり」と常に叫びつゝある者である。故に彼は神に在りて幸福である。然り常に幸福である。蓋し夫れは湧き出でて永生に至る所の泉を有し、其靈は平和と喜悅とにて溢れつゝあるのである。完全な愛は怖を除き、斯くして彼は常に喜んで居る。然り彼は喜に充ちて居る。彼の凡ての骨迄も叫び出す。曰く「讚むべきかな神、我儕の主。イエス・キリストの父其恩の豊かなるにより、我が爲に天に蓄へられたる、汚れなき不朽の家督を望む此活ける望に我儕を再び生み給へり」と。

「此望を保有し、不死の生命に充たされたる者は、凡ての事に感謝を捧げる、何物であるとも、凡ては彼の爲にイエス・キリストの中に賜はる神の御旨と承知して居る。故に主より喜んで凡てを受け上る、主の御旨は善なりと稱して、與へらるゝにも、取らるゝにも均しく神の聖名を讚め上る。安易にも、苦痛にも、病であるとも、健全であるとも、死にも、生にも、彼は心の奥底より、凡てを善の爲に降し給ふ主に感謝する。斯かる御方の聖手に、彼の肉體も靈魂も、忠信なる造主の聖手に托する者として、托し上る。故に彼は決して何事も心配せぬ、保護して下さる主に一切の心配を投げ懸けて居る、而して萬事に就て一應感謝を以て其願を聞え上げた後は、主に於て憩ふのである。

「實に彼は斷えず祈る、故に、如何なる時も彼の靈魂の言ふ所は是である。」「主よ我が口は汝を仰ぐ、假令聲を發せずとも、沈黙の内にも汝に語り上る」と。彼の心は凡ての時、凡ての場合主を仰ぎ見上る、此事に就て決して妨を蒙らぬ、勿論誰でも何事でも之を遮らしめない。退いて一人居る時にも人と交はる時にも、休息にも、従業にも、又會話に於ても、彼の心は常に主と偕にある、臥すにも、起きるも「神は常に彼の想ひの中に在り、」彼は永續的に神と偕に歩む。其の靈源の愛の眼を以て神を見つめつゝ、然り何處に於ても「眼に見えぬ主を眺めつゝ」ある。彼は神を愛する故に彼自身の如く隣人を愛する、彼自身の魂の如くに凡ての人

を愛する、然り、彼自身の敵をも愛するが又神の敵をも愛する。若しも彼を悪む所の者に善を爲すの力が缺乏して居ると感ずる時には、せめて彼等の爲に祈る事を止めぬ。假令敵が彼の愛を蹴返す様な事あるとも、又意地悪く使役し、虐待する事あるとも決して變らぬ。

彼は心清き者である、故に、愛は彼の心を清め、嫉妬、悪意、怒、及び凡ての不親切なる氣質を取り去る、愛は彼の傲慢を取去り、(傲慢からは争ばかり起つて来る)、其代り慈悲、親切、謙遜、柔和、及び忍耐を着服せしめる。斯くして凡て争の基となる所のものは彼に於ては根絶された。則ち、彼は此世又は此世に屬する所のものを愛せぬ者、彼の凡ての望は神に繋かれる者となつた。斯く主の名を覚えて凡を爲す彼を見る時は、誰でも彼が欲する處を拒む事は出来なくなる。

此唯一の願望と一致するものは、彼は自身の生涯に對して唯一の計畫を有すると云ふ事である、則ち、彼自身の意志を爲すに非ずして、彼を遣し給へる主の御

意を爲す、是れである、凡ての時に於て、又凡ての場所に於て彼の有する唯一の計畫は、彼自身を悦ばす爲でなく、彼の靈魂が愛慕し上る御方を悦ばし上る事である。彼は一意専心の人である、彼は一心である、故に全體が光に充たされる、然り全體が光である事、恰も輝く燈光の炎が全室を照すが如くである、神は彼の獨裁の君である、凡て魂の内にある者は「主に聖き」ものである、故に主の御旨に従はざる心の動作はない、又起り来る凡ての想は神を的としキリストの律法に従順である。

木は其果によつて知らると、彼は神を愛する故にその命に遵ふ、其遵守や一部でなく、大部分でもなく、小より大に至るまで全體を奉じても其の最も小さき一つを破つてはならぬと注意する。而して凡ての點に於て、即ち神に對しても、人に對しても良心に恥ぢざる様爲さんと努むる。何物にまれ神の禁じ給ひしものは避くる。又神の命令したる所は何でも之れを爲す。彼は神の命令の途をのみ奔

而も夫れは神に自由にせられしが故に神の誠の道を走るのであつて、斯く爲す事が彼の榮光であり又喜悅である。則ち天に聖旨の成る如く、地にも神の御旨を成す事が彼が日常生活に於ける悦の冠とする所である。

従て彼は力を盡して神の誠を保つ、彼の従順はそれが流るゝ源なる愛に比例するのである。故に斯く全き心を以て神を愛し、全勢力を盡して神に奉仕す。常に其の靈と體とを神の心に適ふ聖き活ける献物として神に捧げるのである。其捧ぐるや少しも残す所無く、全體即ち全所有全人格を神の榮の爲に捧げるのであつて、彼の有する手腕、才能、勢力、靈と肉との全部は神の御旨を成就せん爲に盡す者となる。其の結果として、彼が爲す凡ての事は神の榮の爲である。如何なる種類の仕事に於ても、彼は一心を以て此の目的を達せんと努力し、又、事實それを獲得せざれば止まぬ。其の活動も、休養も、乃至祈禱も此の終極の大目的の爲である。室にあるにも、道を歩むにも、立つにも坐するにも、彼の言語に又其の

行爲に全生涯を通じての唯一事たる、此の事を進捗せしむる爲に盡す。彼が衣服を着するにも、働くにも、飲食にも、過度の労働の後休養するにも、凡ては人々の間に平和と善意とを以て神の榮光を顯彰せん爲である。彼の唯一不變の定則は「爾曹の爲す諸の事、或は言、或は行、皆主イエスの名の爲に之を爲し、彼に由りて父なる神に感謝すべし」(西三ノ一)である。

斯かる人に對しては世の弊習は、其の人の前に置かれたる、信仰の馳せ場を彼が奔るに少しの妨げもせぬ。故に彼は人が火を其の脇に抱いて居る事の不可能なる如く、地上に財寶を蓄へぬ。神に對し又人に對して詐を言ひ能はぬ如くに、隣人の悪口を言ひ能はぬ。彼は決して他人に對して不親切の言語を發し得ぬ。愛は彼の唇の門衛である。彼は無用の言語を語らぬ。又不正の會話を爲さぬ。徳を建つるに有害にして、聽く人に恵を傳ふるに不適當なることは決して言はぬ。故に寧ろ全ての事に於て我儕の救主神の聖訓を崇めつ、「凡そ清潔こと凡そ愛すべ

基督者の完全に就てウエスレー氏の書きし最初の小冊子

きこと凡そ善稱ある事」に就て考へ、語り、又行ふに至る。

以上は自分の有する基督者の完全に就ての意見を初めて大要發表したものであるが、之れに依つて（一）一七二五年以來常に企てたる、別して一七三〇年以後明確に一書の人、即ち他を顧慮する事なく、主として唯だ聖書の人たらんと努めし眞意が明白であると思ふ。（二）此の教義こそ、余が三十有八年の往時より今日に至る迄支持し來りし所の、身心内外の聖潔に關するものにして、又毫も加る所無きものである事が明白である。又一般公正なる人士に對して、之れが往昔より今日に至る迄神の恵により、余が持續して教へ來りし同一のものなる事は、下に掲ぐる拔萃によりても明白である。

十一 此小冊子に對しては、今日迄未だ反對の著述に接した事がない、又此題目に就ても暫く反對の聲、少くとも 眞面目の人々より反對を聞かなかつた。然るに暫時後に至つて、少なからず自分を驚かしめた一つの叫びが起つた、而も夫れは宗敎家から出た叫びである。曰くわが完全の解釋は間違ではないけれども、それは地上に於て達せらるゝものでないと、之れが爲に自分等兄弟に對して、猛烈に攻撃を興へらるゝ事であつた。全體余等の論點が信仰に由つて義とせらるゝといふ事を明白に述べ、又全き救は唯だ神の恩恵にのみ依ると云ふ事に就て、深き注意を以て述べし者なるに、尙ほ如斯攻撃を受くる事は、全く豫期せざりし所であつた。更に最も吃驚せしめられし事は、主は全く救ひ給ふとか、主は我儕の心の獨一の支配者として、凡ての事を彼自身に從はしめ給ふとかいふ事を主張する事が、キリストを汚すものであると言はれた一事である。

基督者の完全に就ての説教

十二 千七百四十年の終りと考ふるが、當時ロンドンの監督であつたギブソン博

基督者の完全に就ての説教

士とホワイトホールに於て會見した。其時完全とは何を意味するかとの問であつた。自分は包み隠す所なく説明した。此問答を終つた時に、監督の言はるゝに、ウエスレー君、君の意味はそれだけならば、それを世に發表したまへ。若し反證し得る者があるならば、するがよからう。との事であつた。之れに對し其の意に従ふ事を約した余は、基督者完全の説教を綴り、之を社會に發表する事にした。此説教中に力説せんとしたものが二つある、第一は如何なる意味に於て、基督者は完全であらぬか、といふ事と、第二は如何なる意味に於て完全であるかといふ事である。

『(一) 如何なる意味に於て彼等は完全であらぬか。彼等は智識に於て完全でない。即ち彼等は無智又は過失から免れ能はぬ。如何なる人にも全能者たる事を望み能はぬ故に、人は勿論過失なき事を期し能はぬ。又彼等は諸種の弱點を有する。例者、事を理解する力に於て弱き事、或は遅き事あるべく、又想像力に於て

速かなる者、又鈍き者あるべし。其の外用語の整はざる、或は言ひ方の優美ならざる等、此外數ふれば、言に行に幾多の缺點を擧げ得べく、擧れば千を以ても數へ得る程あると思ふ。總じて斯かる弱點は我儕の靈が神に還る迄は全く自由ならざる者である。尙ほ又僕は其主に優らぬものなる故に、我儕は全く誘惑より免るゝ事をも期待し能はぬ。斯かる意味に於て、絶對的完全は地上に於てはないのである。繼續的成長を要しない完全はないのである。

(二) 然らば如何なる意味に於て完全であるか。先づ了解して置くべき事は、此處に取扱ひつゝある基督者は成長せるものであつて、赤ン坊の基督者に非ざる事である。よし赤ン坊にしても、基督者たる以上は罪を犯さぬといふ事に就ては完全であるはずである。此事に就てヨハネは明白に確言して居る。假令之れに反する如き事例が舊約にあるにしても、其の眞理を消す事は出来ぬ。或人は問ふ、昔ユダヤの聖者が時々罪を犯したにしても、我儕はそのために、基督者たる者は生

きて居る間は罪を犯さねばならぬと言ふ事は出来ぬと答へる。

聖書には、正しき人でも一日に七度罪を犯すといふではないかと或人は言ふ。決して然らず、實に聖書は「義者は七次たふるゝとも起く」(箴二四〇一六)と書いてあつて全く異つた意味の事である。第一引用されたる聖書の語の中に、一日といふ言はない。此處に意味せられたるたふるるといふ事は、罪に陥ることではなく、此世で災禍にかゝることがあるといふ意味に用ひられてあるのである。然れど、ソロモンの語にも、凡そ人として罪を犯さぬ者なしと言ひしにあらざやと云ふか、疑もなく、ソロモンの當時に於ては、それは事實であつた、又ソロモンよりキリストの時代に及ぶまで、人として罪を犯さぬ人は、無かつた。昔モーセの律法の下にありし事情が如何にありしとも、我儕主の福音の下にある者はヨハネと共に「凡て神に由りて生れたる者は、罪を犯さず」と確言し得るのである。基督者たるの特権は、舊約に記されたるユダヤ教の下にありし所の人々と比較

する事は出来ぬ。時は盈ち、聖霊は興へられてある。神の大なる救はイエス・キリストの啓示によりて人類に齎らされ、天の王國は今地上に基礎が据ゑられた、此事に就ては神の靈、古き日に於て宣告し給へるものがある。(ダビデは基督者完全の龜鑑或は模範ならず)「當日エホバ、エルサレムの居民を護り給はん、彼等の中の弱き者もその日には、ダビデの如くなるべし。又ダビデの家は神の如く彼等に先だつエホバの使の如くなるべし。」(撒加利亞書二二ノ八)

使徒等さへも罪を犯したではないか、ペテロは詐りを言ひパウロはバルナバに對して激しき争闘をしたではないかと反問する人があらば、余は答へん、假令斯く爲ししと假定しても、論者は尙ほ言ひ得るであらうか。二人の使徒が罪を犯せし故に後代に於ける凡ての基督者も亦一生涯罪を犯さねばならぬと。斷して左様な事はあるまい。罪を犯すの必要は決して彼等に於てもなかつたのである。神の恩恵は彼等に足りてゐた。今日亦我等にも足りてゐるのである。

ヤコブも亦「我儕は皆屢々過を爲せるものなり」と言ひしにあらざやと言はるゝか。然り但しヤコブは如何なる人々を此處に意味せしむ。多くの主、又主と稱せられし人も神より送られざる人々を指したるものであつて、使徒自身又は眞の基督者を指したるものではないのである。此處に用ひられし我儕と言ふは、聖經に於ても普通の文章に於ての如く用ひらるゝ、修辭上の用辭であつて、使徒自身又は其他の眞の信者を含めてあるとは思ひ得ぬのである。それは第一雅各書三章九節に「我儕これを以て主なる父を祝ひまた之をもて神の形に像りて造られたる人を誣ふ」とあるが、此處の我儕も使徒を意味しない。又信者をも意味しない。第二前節に「我兄弟よ爾曹多く師となるべからず蓋はわれら師たる者の審判を受ける事尤も重と知ばなり。我儕は皆屢々愆を爲すものなり」。此處の我儕とは誰か、勿論使徒でも又眞の信者でもあるまい。屢々罪を犯す故に大なる咎を受くるものを指したものである。第三此句自身の言ふ「我儕愆をなす」とは、凡ての人又は

凡ての基督者を意味するとは思へぬ、如何となれば直ぐ其次に罪を犯す人に對照して罪を犯さぬ人即ち至き人と稱せらるゝ人を掲げて居る。

又ヨハネ自身の言にも「若し罪なしと言はゞ（壹約一ノ八）これ自ら欺けるなり」とあり。或は（壹約一ノ十）「若し罪を犯したる事なしと言はゞ神を誑者とするなり其道我儕にあるなし」と云つて居るではないかと言ふ人あらんか、

余は左に答へん 第一、十節の言は八節の意味を決定するものである、即ち前の「若し罪なしと言はゞ」といふ言は後の「罪を犯したる事なしと言はゞ」といふ言によつて説明されるものである。第二、要點は我儕が嘗て罪を犯しし事ありや否やを決するにも非ず、又之れ等の句の何れもが、現に我儕が罪を犯し又罪を犯しつゝあるといふ事を主張しては居ないといふにある。第三、九節が八節と十節との兩方の意味を明かにすると思ふ。もし己の罪を認はさば神は信實なる公義者なるが故に必ず我儕の罪を赦し、諸の不義より我儕を潔むべし、之れは恰も彼

が左の如く言つたと同様である。「我既に確言せり基督の血凡ての罪より潔む」と、然らば人は誰でも我は潔めらるべき罪を有たぬ故に潔めを要せぬと云ふ事は出来ぬ、若我等罪なしとか、又我等罪を犯したる事なしと言はゞ自らを欺けるものにして、且つ神を誑者とする者である。されば若し己の罪を認はずならば、神は信實にして正しきものなる故に唯だ我等の罪を赦し給ふのみならず、凡ての不義より潔め給ふ、而して我等は往きて再び罪を犯さぬ者となり得る。此故にヨハネの教理と、新約書を一貫せる真理とを綜合して我等は左の結論に達する事を得、即ち基督者たる者は罪を犯さぬといふ事、**於て、それだけ完全である。**

以上は各基督者にとつて、假令基督に於ける唯の赤ン坊であるとも、興へられたる最も榮ある特權である。然しながら之れに加へて、惡しき想ひ及び惡しき性情から自由にせられてあるといふ事を言ひ得るものは、唯だ成長したる基督者のみの表言し得る事である。先づ第一に惡しき即ち罪の想が取り去られなければな

らぬ。全體何處から、其の惡しき想が湧き出づるのであるか。夫が出る處があるとするならば、心情からである。然らば若し其の心情が最早惡しくないならば、惡しき想も亦それから出で來らぬはずである。恰も善き樹は惡しき實を結び能はぬが如くである。

人が惡しき想から自由にせられ**ぬ**が如くに、又惡しき氣質からも自由にせらるゝ事が出来る。此經驗を有てる所の者はパウロと共に言ふ「我基督と共に十字架に釘けられたりもはや我生けるにあらず、基督我にありて生けるなり」と。此の言葉は明白に人が内と外とに於て罪より救ひ出されたる事を述べるものである。此言葉は又積極と消極との兩面を表して居る。消極的に「我生けるに非ず」とは惡の本性、即ち罪の本体が破壊されたる事を意味し、積極的に「基督我儕にありて生けるなり」といふは其の結果として聖なるもの、善なるもの、義なるもの、善なるもの、我等の衷に宿れる事を意味する。實に「基督我にありて生けるなり」と云ふ事

と、「我生けるに非ず」といふ事との兩側面は分つ事の出来ぬ關係のものである。是れ、光と暗きと、又キリストとベリアルと何の交りあらんやと言ふ如きものか。

基督者のうちにやどり給ふ神は、信仰によつて彼等の心を潔め給うたのである。故に其衷にキリストを有つ者は誰でも此榮ある望によつて、主の潔さが如く潔めらるゝのである。即ちキリストは心謙れる方でありし如く、彼の高慢が取り去らるゝ、又キリストは父の聖旨を爲す事をのみ欲し給ひし如く、彼亦我儘なる慾望より潔めらるる。又彼は主の柔和、温順に在られし如くに、普通の意義に於ける怒に就いて潔めらるゝ。余は普通の意義に於ける怒と云ふ、蓋は主も罪人の爲に悲み給ふけれ共、罪惡に對しては怒り給ふ。神に對する凡ての罪に對して不満を抱き給ふけれ共、罪人に對しては憐みを有ち給ふ。

斯くイエスは其民を罪より救ひ給ふ。唯だ外面の罪よりのみならず、内心の罪よりも救ひ給ふのである。或人は言ふ、夫れは此地上に於てはあまゝあるまい。人が死する前ではあるまいと云ふ。決して然らず、ヨハネが此の如く我儕の愛全備を得て鞠日に懼なからしむ、蓋主の如く我儕世に在ればなりと言つたではないか此處にヨハネは疑も無く彼自身と其他の活ける基督者に就て語つて居るのである更に彼等自身に就て、斷乎として明言じて居る事は、唯だ死に際してとか、或は死して後とかいふに非ずして此世に於て彼等は主の如く有り得ると言うたのである。

彼の書簡の一章に適切に之れに一致する言葉を語つて居る。「神は光なり、少しも暗き所なし」と、又「若我儕神の光にある如く、光の内を歩かば吾儕互に同心となるを得、且つ其子イエスキリストの血凡ての罪より我儕を潔む」と又「もし己の罪を認はさば神は信實なる公義なるが故に、必ず我儕の罪を赦し諸の不義より我儕を潔むべし」と、斯く此處にヨハネの所謂救は此世に於て成就さるゝものである事を語つて居る事が明かである。彼は決してキリストの血が潔むるで

あらうとか又死の時或は審判の日に於てとは、語つて居らぬ。寧ろ現在に我儕の生ける基督者が凡ての罪より潔めらるると語つて居る。更に明白なる事は、若しも罪が残つてゐるならば凡ての罪から潔められたのではない。若し不義が少しでも我魂の内に残つてゐるならば、それは凡ての不義から潔められたものとは云へない。此處に於て或反對家は曰ふ、此所は只義とせらるるといふ事、即ち罪の咎より潔めらるる事のみをいふのであると、決してさうではない、如何となれば第一ヨハネは我儕の罪の赦さるる事と、凡ての不義より潔めらるる事を區別して書いて居る。第二に反對者の議論は行によつて義とせられることを力説することになる。外部の全體と同様に内部の全體が潔くある事が、義とせらるるに先ちて必要であるといふ事を示すものである。何故ならば、若し此處に語つてある潔めといふことが罪の咎から潔めらるだけのこととするならば、我儕は主の光にある如く光の内を歩むに非ざれば、罪を赦されず義とせられないといふ事になる。

結論はかうである。基督者は現世に於て凡ての罪から、又凡ての不義から救はる者である。従つて現在に罪を犯さぬ者、又悪しき想、悪しき性情から、自由にされてあるといふ意義に於て完全になる者と云ふ事が出来る。基督者の最上の階級と人々にも思はれ恐そらく自分達もさう思つてゐる人々の持説に對して、大反對である斯ういふ説教は尠なからざる反感を其人々に與ふるであらう。従而多くの批評或ひは反駁があると期待して居りしが、愉快なる事は、余の知る限り反對説なきが故に、只靜かにものが道を進み來た次第である。

讚美歌第二篇の緒言

十三、其後久しからずして、一七四一年の多分春と思ふが、讚美歌の第二篇を發行した。此時尚ほ此教理が多く誤解され從而誤傳されてあつた故に尙ほ一段の説

あらうとか又死の時或は審判の日に於てとは、語つて居らぬ。寧ろ現在に我儕の生ける基督者が凡ての罪より潔めらるると語つて居る。更に明白なる事は、若しも罪が残つてゐるならば凡ての罪から潔められたのではない。若し不義が少しでも我魂の内に残つてゐるならば、それは凡ての不義から潔められたものとは云へない。此處に於て或反對家は曰ふ、此所は只義とせらるるといふ事、即ち罪の咎より潔めらるる事のみをいふのであると、決してさうではない、如何となれば第一ヨハネは我儕の罪の赦さるる事と、凡ての不義より潔めらるる事とを區別して書いて居る。第二に反對者の議論は行によつて義とせられることを力説することになる。外部の全體と同様に内部の全體が潔くある事が、義とせらるるに先ちて必要であるといふ事を示すものである。何故ならば、若し此處に語つてある潔めといふことが罪の咎から潔めらるだけのこととするならば、我儕は主の光にある如く光の内を歩むに非ざれば、罪を赦されず義とせられないといふ事になる。

結論はかうである。基督者は現世に於て凡ての罪から、又凡ての不義から救はる者である。従つて現在に罪を犯さぬ者、又悪しき想、悪しき性情から、自由にされてあるといふ意義に於て完全になる者と云ふ事が出来る。

基督者の最上の階級と人々にも思はれ恐そらく自分達もさう思つてゐる人々の持説に對して、大反對である斯ういふ説教は尠なからざる反感を其人々に與ふるであらう。従而多くの批評或ひは反駁があると期待して居りしが、愉快なる事は、余の知れる限り反對説なきが故に、只靜かにものが道を進み來た次第である。

讚美歌第二篇の緒言

十三、其後久しからずして、一七四一年の多分春と思ふが、讚美歌の第二篇を發行した。此時尚ほ此教理が多く誤解され從而誤傳されてあつた故に尙ほ一段の説

明の必要を感じて、此緒言中に左の如く述べた。

「此神の偉大なる賜物、我第の靈の救は神の御姿が新たに我心の内に印刻せらるるに外ならぬ、之れは即ち信ずる者の心が、造り給ひし主の御姿に改造さるる事である。神は今斧を樹の根に置き、信仰によつて彼等の心を潔め、又聖靈の靈感によつて彼等の心の凡ての想を潔めんとしつづ在り給ふのである。『神の眞状を見る』望をもち、見より得べく、『神の潔さが如く自己を潔く』し、『召し給ふ聖者に倣ひてすべての行に聖く』なる。但し之れは彼等が到達すべき頂點に既に達したとか、或は此意味に於て完全であるとかいふ意味ではない、只日々『力より力に進み、』今鏡に照すが如く主の榮を見榮に榮いや増りて其同じ像にまで化へ』られて行く事である。

主の靈のある所に自由がある、此自由とは罪と死との法からの自由であつて、世の子供等が聞かされても之れを信ずる事の出来ぬ所のものである。聖子は彼等に自由を與へ給うた、是によりて人は神より生れたるものとして、罪と苦との大なる根なる誇より自由にせられたのである。斯かる人の凡ての満足は神にあるのであつて、即ち神が其想の總てである、神その善旨を行はんとて彼のうちにはたらき彼をして志を立て事を行はしめ給ふ』のである。又彼は悟る、其魂の内に語る所の聲は彼自身の聲に非ずして父の靈の聲が其衷に響くのであると、又自分の手の爲す所も皆内に在ます父其業を爲し給ふのであると、斯く其人にとりて神は凡ての凡てに在す、而して自身は神の前に無きが如き者であると考へる。斯かる人には私慾がなくなる、唯だ神の聖にして至き御旨の外何物をも望まぬ者となる、缺乏に於ても單に充たされん事を望まぬ、苦痛に於ても唯だ安からん事をのみ望まぬ。生にも死にも、將た如何なる被造物に對する態度に於ても、只其心の衷には父よ汝の聖旨をのみ爲し給へとのみ常に叫ぶ。斯かる人には惡しき考が起り能はぬものとなるのである。嘗ては、惡しき想が起りし時仰ぎて上を眺める事に

よりてそれが消え去りしが、今は悪想が起らぬ様になる、神に充たされたる魂の中には悪しき想の居り場所が無いのである。斯かる人は祈りの時に於て迷ひを感ずる事がなくなる。彼等が心を神に注ぐ時に、嘗てよりはもつと神の聖前に直接なる感がある。其考の内に過去の事、即ち今あらざる事に就ても、又來らんとする事に就ても少しも執着せず、只だ神にのみ就て考へる。昔は或る迷が心に突起し來りて又烟の如く消え去つた事もあつたが、今は左様な烟は少しも昇り來らぬ。今は一般の事又特別なる事に就ても少しも怖れもなく又疑も無くなつた。『聖主より沃がれたる膏』は、毎瞬時何を爲すべきか、又語るべきかを彼に教へ給ふ、故にそれに就て理由を尋ぬる必要も無い。斯かる人には或意味に於て誘惑が無くなる。無数の誘惑は其周圍に飛び廻る、けれ共屢それは妨げにならぬいつでも斯かる人の魂は沈着で又平和である、其心は堅實に、そして不動である其平和は河の如くに流れ出で人の想に過ぐるものである。其悦は言ひ盡し難く

榮に充てるものである。是彼等が救の日の爲に聖靈によつて印せられ、又其衷に證ありて義の冠、即ち審判の日、主が彼等の爲に與へ給ふ所のもの、彼等の爲に蓄へられてある事を信じ得るに至りたる所以である。

人が斯く愛の内に改造せられてある迄は、悪魔の子であるといふ譯はない、若し神に對する確實なる信頼あれば、基督の功績によりて彼の罪は赦され神の子とせらる、又主の内に宿るならば凡ての約束の世嗣とせらる、故に如何なる事があつても自分が弱いからとか、或は火の如き試煉を受けて、多くの誘惑の爲に魂が疲れて居ると云ふ故を以て、神に對する信頼を放擲したり、又一度受けたる信仰を否認する必要は少しもない。

回心に際して全く救に入らざりし者

或人の謂へる如く、此の救は至たく一度に與へらるゝものであるとは決つして

回心に際して全く救に入らざりし者

言はぬ神が其の子達に對して爲し給ふ御業には即時的のものあり、又漸次的のものがある罪の赦しの明白なる感、若くは聖靈の宿り給へる證を、一時に受けた所の多くの證人がある事を知る、然れど同瞬間に罪の赦しと、聖靈の宿り給へる證と新らしき清き心とを受けたる人が一人でもあると云ふことを何處よりも聞かぬ。

勿論如何に神が働き給ふか、我々の計り能はぬ所である、乍併彼が爲し給ふ御業の普通の方法は是れである。即ち人が自分を信じて我は富めるもの正しきもの富に進みつゝあるもの、何の缺乏もなきものと思つて居る時に、神の靈彼に來り其聖言彼の心を照す時始めて自分は貧しきもの裸なるものである事を悟らせられるのである。其時彼の嘗て爲したる業が其記憶に還り來り、自分の真相を示される時、神の怒り頭上に懸りて、我は地獄の刑罰に償すと感ずるのである。此苦みの内に彼は神に叫ぶに至る。其時神は汝の罪既に取り去られ、天の王國、即ち聖

靈によれる義と和と悦びとが與へられてある事を示されるのである。斯くして悲みと苦みは飛び去り、最早『罪は其人のに主とならなくなる。斯の如く人が信仰によりて主の血潮を信するに由り、自由に義とせらるゝ事を知る時に、彼はイエスキリストに依りて、神と和ぎ、神の榮を望みて悦び、又神の愛其心に注がるゝものとなるのである。

回心に續いて起る事

人は斯かる平和の中に、數日、數週若くは數ヶ月間止まり得る。そして普通に人々は戦は最早來らぬものと想像して居る。併し夫れは彼の古き敵、罪の根、若くは嘗て容易く敗らされし種類のもの（例へば怒り或は慾望）來りて激烈に彼を攻め、投げ、又は陥れる迄である。敗れたる時は怖れ再び生じて、これでは終り迄忍ぶ事は出來ぬであらうと思ふに至る。或は神が我を忘れ給うたのではない

回心に續いて起る事

かとか、又罪赦されたと思つたのは間違ひでないかなどと疑ひ始めるのである。此迷ひの内に若しも悪魔と一緒に理窟でも言ひ合つて居つたならば、朝から晩まで其通りである。然し普通、如此場合主は主御自身我に答へて下さつて慰めの爲に聖靈を送り、吾靈と共に神の子たる事を證なさしめ給ふのである。斯くして人は赤兒の如く穩和に、從順に、又よく教を聞くものとなる。

回心者の惡

斯くして初めて人は其心の根底の有様を示さるのである。夫れは神が今日迄彼に充分あらはし給はざりしものである、然らざれば魂は神の前に倒れたかも知れぬ。扱て今隠れたる惡が其所に存在する事、誇りと我慾と地獄との深さを發見せしめらるゝに至つた。乍去此火の如き試煉の内在に在つても尙ほキリストと共に神の國の世嗣たるとの證が其心の内にあるに由て二つの感じが次第に強くなつて来る、一は自身を支ふるに如何にも自身の無力なる事である又他の感じは、此故に義と眞の聖とに於て、主の御姿に全く改造されたいとの言ひ難き渴望が成長して來るのである。

第二の恩寵

然る時に神は、神を懼るゝ此人の願を聽き納れ給ひて、單一なる心と、清き心とを與へ給ふのである。神は御自身の御姿を、其人に印刻なし給ふのである。神は此人をキリスト・イエスの内に新らしく創造なし、御自身聖子及び恵みの靈と共に來りて其魂に宿り給ふ、而して神の民の爲に保留されたる憩に入れ給ふのである。

こゝに余が語らざるを得ざる事は、第一以上は基督者の完全に就て嘗て提出せ

し最も強き説明である、實にもとの或言葉は後にある註に記しし如く、或點に就ては餘りに強くある位である。第二、緒言に直接、或は間接に示されてある此題目に就ては、爾來詩に於ても、又其他の文章に於ても是れ以上進みたるもの、無き事である、夫れ故に現在の教理が正しくあるとも、又間違つて居るとも、兎も角も我儕が初めより教へ來つたものと同様のものである。

一四、以上の證明に附加する爲に、此詩集より多くを引用する必要はないと思ふ。只だ左に採録する此歌集の最後の歌の一部で澤山であると思ふ。

主よ信ず、汝の民の凡てに知られたる安息の存する事を、安息、其處は清き悦びの支配する所にして、唯汝のみ愛せられ給ふ所なり。

安息、其處は凡ての魂、仰いで望を天に繋ぐ處、其處には疑も、苦みも、恐怖も皆盡きて全き愛の領する所なり。

聖子、我等に自由を與へ給ひしにより、我儕は凡ての惡の力より逃れ、榮ある

自由もて陰府の凡ての力に勝つを得るなり。

死と、地と、陰府とを越えて、命の道に上り行き、愛に全うせらるる時は長く求めし樂園の我儕の前に開かれたるを見る。

オ、主よ今我をして、安息を知り、信じ、又進み入らしめ給へ、救主よ、今力を與へて我を罪より斷ち給へ。

主よ願はくは我心より此頑固と不信とを去り、信仰の懇、愛の安息を注ぎ入れ給へ。

來り給へ救主よ、我が内に降り給へ、願はくは爾の造り給へる我を長く離れ給ひそ、オ、我が造主、我望なる主よ。

主よ備へ給ひし恩をな猶豫し給ひそ、降り給へ、優れて大なる我報なる主よ、蓋は我こそ汝の爲に初より備へられたる者ならずや。

降り給へ、父、子、聖靈の神よ、來りて我に宿り給へ、凡て我が有するものを

爾に捧げ、又凡ての物を神に捧げしめ給へ。
以上にて最も明白であると思ふが、

(一) 此處にも亦嘗て我儕が語りし所の、充分なる又高き救が顯はされてある。

(二) 是は只だ信仰によつて獲得せらるゝものにして、只だ不信に由つてのみ妨げらるゝものである。

(三) 此信仰及び其結果として齎らす所の救は、即時に與へらるゝものである。

(四) 此即時が今であり得る、我儕は他の瞬間を待つ事を要せぬ。此今、眞の今が恩みの時である。然り今こそ此充分なる救の日である。但し若しも之れに反して語る者があるならば、其人は新らしき教理を我儕に提出するのである。

讚美歌集第三卷の緒言

十五、約一年の後即ち一七四二年、更に讚美歌集を發行した。其頃此題目に就け

る争ひが烈しくなつて居つたので、嘗てよりは、もつと充分に述ぶる事にした。従つて此卷に收めたる歌の多くも、此題目に就て明白に取扱つて居る、然して緒言は短かいものであるから、左に全體を採録しても過であるまい。

(一) 凡そ基督者の完全に反對する有ふれたる僻見は、多く其本質の誤解より起つて居る様である。先づ我儕が喜んで承認し、又宣言する所は左の意味に於ける完全は地上になきものであると云ふことである。善を努むるに於て完全にされたとか、神の凡ての誠を守るに及ばぬとか、又は無智過失誘惑及び肉と血に必然關聯してゐる多くの弱點が無くされたとか是等の事を含む完全は地上にないのである。

(二) 第一、唯だ我等が承認するのみならず、熱心に主張する事は、凡て神の戒を守り、又時を得て凡ての人に善を爲す事、殊に信仰の家族に爲す事此の如き命令を命令として守るに及ばぬと云ふ様な完全は地上にない。そこで基督者として、新らしく主の救に入りし赤ン坊であつても、又完全なる大人に成長したる者

も、一同必須的の務として遵奉せなければならぬ事は、主を記憶する爲にパンを割き、血を飲む事、又聖書を讀む事、斷食をする事、肉體を節制鍛鍊する事等である。殊に努へきは密室に、或は集會の席に於て精神を注ぎ出して祈る事である。

(三) 第二、救に對して肝要であらぬ事柄に就ての無知及び過失或は多くの誘惑或は無數の弱點、それは多少とも敗類の傾きある肉體が靈魂を壓迫するより起る弱點に於ては此地上に於ては全く免れたる完全のある事を信ぜぬ。聖書にも、土地の家の住民が全く肉的弱點から免れるとか、多くの事柄に就て無知たるを免れるとか、又信者は少も過失に陥らないとて、少しの誘惑にも陥らぬものであるとか、如此完全を想像する根據となる言葉はない。

(四) 然らば完全なる人とは如何なる人を意味するのか、我等の意味するは、キリストの心を心とせる人、キリストの歩み給ひし如く歩む所の人である、彼は純潔なる手、又清き心を有す、即ち肉と靈との凡ての汚れから潔められたる人である。

彼には跌く機會がない、從て罪を犯さぬ。もつと之れを切言するならば、我々は聖書の「完全人」を下の如く説明する、「我、汝等の諸の汚穢と諸の偶像を除きて汝等を清むべし、又汝等を救て其諸の汚穢を離れしめん」と仰せられた神が其聖き言葉を忠實に成就し給ひし人を謂ふのである。故に我々は神が其肉、其靈、其精神を全く潔め給ひし人とは、主の光に在らずが如く、地に歩みて全く暗きの無き人、又其子イエス・キリストの血、凡ての罪より潔めた所の人であると了解して居る。

(五) 斯かる人こそ凡ての人々に向つて、我れ基督と共に十字架にかけられたり、我生くるに非ず、今尙ほ我が生くるはキリスト我にありて生くるなりと證言することが出来る。彼は彼を召し給うた神の聖きが如く、心と其凡ての會話に於て聖くある、彼は其全心を以て其神を愛し奉り、全力を以て神に仕へ奉る。彼は彼の隣人凡ての人を彼自身の如く愛する、然り基督が我儕を愛し給ひし如く行

ふ、殊に父及び子を知らぬ故に慘酷に彼を使役し又迫害する所のものを愛する、實に彼の魂は凡て愛である、慈悲、親切、柔和、温順、忍耐を以て盈ちてゐる、又彼の生活は信仰によりて行ひ、望みによりて忍び、愛によりて勞するに全く叶ふ生活である、又何事を爲すにも其言或は行ひ、凡て主イエスの愛と力によりて主の聖名の爲に之れを爲す、約言すれば聖旨の天になる如く地にならんが爲に行動する人である。

(六) 完全なる人、全く潔められたる人となる爲には、(大監督アツシヤ一の云ひし如く)

『凡ての思想、言、業皆基督に依て神の心に適ふ靈的献物として絶えず捧げるほど神の愛を以て常に燃やされてゐる心を有つことである。』我儕の心の凡ての思想、又我儕の凡ての言、我儕の手の凡ての業、暗きより我を出して其驚くべき光に召し給ひしもの、榮を顯はさんが爲に動ねばならん。然らば、我儕及眞實に主

イエスを求めて居る所の人々俱に主の祈の如く一に全くされたいものである。

意見の變化を認めず

是即ち最初より教へ來りし教理にして、今も尙ほ主張する所のものである。實は如何なる光に照らして見ても、又神の言葉に再三比較して見ても、又神の子達の經驗に照らして考へて見ても、我等は一層深く基督者完全の本質と特性とを悟る事が出来る、斯くの如く考證しても尙ほ初めの意見と今日の立場とに、相違のあらぬ事を發見する。我儕の最初の考へに完全とは基督の内在に在りし心を有し、キリストの歩み給ひし如く歩む事である、又彼の内に在りし凡ての心を有し、彼の歩みし歩みを常に歩むといふ事、即ち内にも外にも、心と生活の一切を神に奉獻する事であると思つた。今も尙ほ之に附加もなく減削もなく同様に考へて居る。十六、聖歌集第三卷に現はれ居る此教理に關する思想の一々を此處に載録するに

は餘りに數多ければ其中三篇の一部づゝを左に紹介することにした。

(1) 罪の救主よ、イエスてふ君の聖名のしめす癒を味はひ、われ愛に全くなりて全所有、我力、我性凡てを捧げんとて待ち望む。實に僕は主の如く在るべしとの御言に頼りまつる。

衷心の祈に答へて我凡ての罪を潔め天津聖國の住居に適ふ者と爲給へ、主よ、生命をすて給ひし御目的を我がうちに全く爲し給はんことを、凡の不義よりあがなひ我をば復し天にふさはしきものとなし給へ。あらゆる汚れを潔め給はずば、主よ、贖の御苦も我信仰も共に無用に果てなん。

おのが爲ならで、唯主に在りてのみ我を活しめんとて君は死給はざりしか、此は先づ自ら全てを與へ給ひし君に我體我靈我心凡てを献せしめんとてに非ざりしや、然ば我主よ我神よ、來りて血を以て贖ひ給ひし我を領し給へ。主よ、僕君の眞と恩恵との故に求め上る、願くば聖名を我衷に榮えしめ今こ

そ我をさみのものとし給へ、我凡ての瀆を潔め、わが全性を更へて聖となし、唯主の爲に生き又死ぬる者とならしめ給へ。

(2) もしや今、世よりえらばれ、神の義を被らせられて御約束の國に導かれ、主を我救主と呼び上り得なば、主よ願くば、潔めの靈を注ぎて我渴を止め我を洗ひきよめ給へ、今こそ救主よ恵の雨もてわれをば罪より潔め給へ。

我が凡ての汚瀆よりきよめ、わが偶像をすべて除き、凡ての悪念、私心、誇よりきよめ給へ。

我身より憎しみを除き、聖にして柔和なる、謙遜の心を與へ、我をして信仰と愛とに充たしめ給へ。

罪より救はれし身に、今御約束の地カナン、愛の憇に入れとの御言如何に確

意見の變化を認めず

實なるかを證せしめ給へ。

願くは完全の清きに達し、最早墮落の憂なき者となさせ給へ、實に我は無き者、主こそ全ての全てに在し給ふと思はせたまへ。

(3) 主よ、爾の恵の聖業人の衷に完く、聖顔を仰ぐ者の心は清く其靈完うせらるゝを信ず。

聖言は凡ての病を癒し凡ての患を去り我儕を救ひて完き健康完き聖潔に到らしむ。

全く罪に死にたる者こそ榮ある自由を歩むなれ。眞理なる聖子によりて自由を得たれば眞の自由を保つなり。

主によりて新にされたる者、神の榮其衷に輝き、神の義に装ほはれ、神を着、神に充たさる。

此生活こそ平和、安息、生命の充ちたる生活なれと爾の聖徒は知れり、愛は完全の結にして聖徒の魂は全き愛なり。

恵の教喜の響、イエスは我にさへ聖顔を示し給ふ、故に我は地上に於て完く聖とせられ得べし。

主は土くれの家を訪ひ其殿を震はせ給ふ、オ、主よ、願くは此喜の日來りて御殿に宿らせ給へ。

來り給へ、主よ、來りて此大なる空隙を充たし給へ、主のみ克く我靈を充たし得給ふ、神よ來り給へ。

我要求、無限大なる我要求を充たし給へ、主よ、汝に滿てる者を以て我衷の望凡てを充たし給へ。

Handwritten signature or initials.

第一、第二、第三年會記録より

十七、一七四四年六月二十五日、月曜日、我儕の第一年會が開始された。六人の教職と總て所屬の教師達が列席した。翌朝一同は嚴肅に聖潔即ち完全の教理に就て熟議した、其問答の要領は左の如くであつた。

『聖潔とは何ぞや。』

『義と眞實の聖とに於て神の聖姿に再生せしめらるゝ事である。』

『完全なる基督者とは何を意味するか。』

『心を盡し精神を盡し力を盡して神を愛する者である。(申六〇五)』

『是は凡て内心の罪まで取り去られたるを意味するか。』

『疑もなく然である、然らざれば、いかで我儕は凡ての汚穢より救はれてあると言はれやうか。』(結卅六〇二九)

一七四五年八月一日第二年會が開會された。其翌朝、完全に就て次の如く語つた。

『何時内部の聖潔は始めらるゝか。』

『人が義とされたる瞬間より、(夫れでも尙ほ罪が彼の内に残つて居る。然り罪の根がある。是は彼が全く潔めらるゝ迄残る) 此時以降信者は漸次罪に死し、恩に成長するのである。』

『普通是は死の少し前までは與へられぬ事なるか。』

『夫れより早くは期待しない人には與へられぬ。』

『夫れより早く期待する事も出来るか。』

『出来る筈がない、尤も』

- (一) 我儕の知つて居る普通一般の信者は、死の際迄其程度に潔められて居ない。
- (二) パウロが彼の書簡を書き送りし當時の人々の間に於ても、稀に達したる者ありし位なる事。

(三) バウロ自身も之れより前の書簡を認めし時には達し居らざりし事。以上の事實を承認するとも今日我儕も亦是より早く、達し得ぬ證據にはならぬ。」

『如何なる態度に於て我儕は完全を教ふべきか。』

『進んで求めぬ人には教ぬがよからう。進んで求むる人には約束としてのやましめる様にするがよい。常に開發的の態度を取て、決して注入主義を取てはならぬ。』
 第三年會は一七四六年五月廿六日火曜日に開始された。此年會に於ては前年會の記録を精讀した。更に熟した考を以て何か訂正する處はないかと查べた。其結果前年我等が一致した點に何等變更すべき理由がなかつた。

第四年會は一七四七年の六月十六日火曜日に始まつた。列席者中數人が完全の教理を信ぜぬ人々であつたので、根柢から之れを查べる事に一致した。其時の問答は左の如であつた。

『完全聖潔に就て意見を異にせる兄弟達が、何處まで我儕の所説を、受け入れ得るか。』

『反對の人でも承認する點、』

- (一) 人は凡て死の刹那に於て完く潔められてあらねばならぬ事。
- (二) 其時迄信者は日々恩に成長し次第々々に完全に近づかねばならぬ事。
- (三) 我儕は全く潔くなる爲繼續して努力すべく、又人をも勸めて、左様爲さしめねばならぬ事。

『我儕は何處迄反對の人々の所説を受け入れ得るか。』

『我儕の承認する所、』

- (一) 信仰を持して死せし多數の人、然り我儕の知れる多部分の人は死の僅か前迄、愛に於て完全ならざりし事。
- (二) 聖潔といふ名辭をバウロは義とせられてある人に對して常々用ひ居りたる

事。

(三) 唯彼は此名辭丈を用ひる時には凡ての罪より救はれたといふ意味には滅多に若くは一度も使はなかつた。

(四) 従て、此名辭に悉くとか、完くとか云ふ字を加へないで其意味に用ひてはならぬといふ事。

(五) 靈感を受けたる記者達は、義とせられたる人に就て、又之に對して常に語つて居るが、完く潔くせられて居る人へのみ就て、又之に對しては滅多に語つてゐない事、(六) 従て義とせらるる状態に就て常に語る筈である。が完全なる聖潔と云ふ事には就ては明りした言葉で語ることを割合に稀にする様にする事。』

『然らば如何なる點に於て我儕は分れて居るか。』

『夫れは、我儕が死の刹那の前に凡ての罪より救はるゝ事を期待す可きや否やに在る。』

此教理を證明する聖句

『神が我儕を凡ての罪より救ひ給ふと云ふ明白なる約束が聖書中にあるか。』

『詩百三十の八』「彼はイスラエルを其諸の罪より贖ひたまはん」とある。

是は更に多くエゼキエルの預言中に述べられてある「清き水を汝等に灑ぎて汝等を清く在らしめ汝等の諸の汚穢と諸の偶像を除きて汝等を清くすべし。又、我汝等を救ひ其諸の汚穢を離れしめん」(エゼキエル三十六〇廿五及二九)如何なる約束も此より明瞭なる者はない。使徒も明白に此約束を引照して勧めを爲て居る。「我儕此約束を得たれば、肉と靈の凡の汚を去りて、自己を潔くし、神を畏れて聖潔とを就成すべし」とある(哥後七〇一)。是と同様明白なる者が往昔の約束にもある。「汝の神エホバ汝の心と汝の子等の心に割禮を施して汝をして、心を盡し精神を盡して汝の神エホバを愛せしめ、斯して汝に生命を得させ給ふべし」と(申卅〇七)』

此教理を證明する聖句

『之れと相對する同様の者が新約聖書にあるか。』

『然り、先づ、壹約三〇八に明白なる辭句を以て述べてある「神の子の顯はるゝは惡魔の工を毀たん爲なり」と、是には少しの制限もない。而して凡ての罪は惡魔の工である。是と並行してパウロの告白がある。是はエペソ五〇二五——二七の言である。「キリストは教會を愛し其爲に己を棄て給へり。此は汚點なく皺なく凡て此の如き類ひなく聖にして瑕なき榮なる教會を自ら己の前に建てん爲なり。」

又羅馬書八の三・四節に是と同意の宣言がある。「神は其獨子を遣し結へり。此は律法の義は肉に従はで靈に従ひて行ふ我儕に成就せんが爲なり。」

『更に進んで新約は人が凡ての罪から潔められる事を期待し得べき基礎を提供する乎。』

『疑もなく、新約聖書は其基礎を提供するものである、即ち最も強き斷言に等しき者が祈禱及命令の形式に於て言はれてをる。』

『それは何んな祈禱であるか。』

全き潔に就ての祈禱、若し全き潔と云ふ様なものがないとするならば、それを願ふ祈は必意は神に對する嘲となるであらう。具體的に云へば、

(一)「惡より我儕を救ひ出し給へ」との祈である、此の祈が成就さるゝ時は、我儕は凡ての罪より救ひ出されたる時である、然らば残り居る罪は無い筈である。

(二)「我唯だ彼等の爲にのみ祈らず、彼等の教に因りて我を信する者の爲にも祈る、此は皆一にならん爲なり、父よ爾我に在り我亦爾に在り斯くの如く彼等も我等にをりて一にならん爲なり、」我彼等に居り、爾我に居る、蓋は彼等も一となりて全せられんためなり(約一七〇廿一廿三)

(三)「此に由りて神我儕の主イエス・キリストの父に跪きて願ふは爾曹をして愛に根し愛を基として諸の聖徒と偕に測るべからざるキリストの愛を知り、其の潤さ、長さ、深さ、高さを識らしめ又凡て神に満てる者を爾曹に満たしめ給はんこ

となり。』(エペソ三〇一四以下)

(四)「願はくは平安の神自ら爾曹を全く潔くし又汝等の全霊、全生、全身を守りて我儕の主イエス・キリストの臨らん時に咎なからしめ給はんことを」(テサロニ

カ前五〇、廿三)』(一テサロニカ〇廿一、廿三)

「如何なる命令が之と同様の目的の爲に與へられてあるか。』

「(一)「天に在す爾曹の父の完全が如く爾曹も完全なるべし、」(馬太五〇四八)

「(二)「爾心を盡し精神を盡し、意を盡し、主なる爾の神を愛すべし、」(太廿二、卅

七)「若し神の愛、我心を凡て充たし給ふ時は罪は其處に止り得ない。』

「是等が臨終の前に成就せらるゝと見る所以如何。』

「(一) 是等の命令の本質上、是は死人に與へられたるに非ずして活ける者に與へられたる者である、汝心を盡して神を愛すべしとは、死にて後にと命せられたるとは思へぬ、生ける内に爲せとの命に違ひない。』

(二) 聖書の明白なる言句、(イ)「夫れ凡ての人に救を賜ふ神の恩あらはれ、我儕を誠め我儕をして神を敬はざる事と、世の中の慾を棄て、自ら制し正しく且つ度みて、今の世に存へ望所の福と大なる神、即ち我儕の救主イエス・キリストの榮の顯れん事を望待たしむ、キリスト我儕の爲に己の身を捨て給へり、是れ我儕を諸の罪より贖ひ出し、且己の爲に一の民を潔め之をして熱心に善事を行はしめん爲なり」(多二の十一—十四)(ロ)「我儕の先祖に約し給ひし恵を果さん爲なり、是我儕の先祖アブラハムに立てし所の誓にして、我儕を敵の手より救ひ、我儕の生涯を聖と義に於て懼れなく主に事へしめんとなり、」(路一の六九以下)』

「聖書の中に此目的を達せし事例ある乎、』

「然り聖約翰及び彼の語りし所の人、此の如く我儕の愛全備を得て鞫の日に懼れなからしむ、蓋主の如く我儕世に在ばなり」(壹約四〇一七)』

「現代に斯る例ある哉、何處に如斯完全に達せし人ある哉。』

此教理を證明する聖句

「斯る質問をする或人々には、假令斯の如き人を知るとも夫れを君に言ふ事はしない」と答へよう。何故ならば君達は愛の心から質問するのではなく恰もヘロデ王の如く、唯赤兒を殺さん爲の尋である。但しモット直接なる答は、確かな事例は少いこと、又はないことの理由は澤山ある。凡ての人の目標にさるゝ人にとつて、如何に多くの不便を與ふるか考へねばならぬ、また反駁者にも益を與へ得まい。一人若しモーセと律法とに聞かずば、即ちキリストと其使徒に聽かずば假令死より甦る者ありとも、如何で聽かんや」である。

「我儕は、我は凡ての罪より救はれたりとする人に對して、窃かに嫌惡の情を懷く様な事はなきか。」

「數個の理由に依つて、我儕は此種の情を有つ事がある、一は魂夫れ自身の善なる本質上、斯く言ふ人にして、其實に適せぬ人であつたならば、此情を有する、或人は己れ自身より更に高きに達して居る人に對して、幾分妬を懷くよりする人がある、又或は神の御業を信ずる心の自然に鈍く、受入れ難きより斯く爲す人がある。」

「何故我儕は完全なる愛に達する迄、信仰の喜悦を保續し得ないか。」

勿論得る。聖き悲は、此喜悦を消す者ではない、假令十字架の下に在りてキリストの苦を深く分つ時でも、我儕は言ひ難き喜悦がある。

以上採録せる所は自分兄弟及び一七四四年以降四七年に涉關係ある教師の凡の判断である事を打消事は出来ぬ。又是等の年會に於ては一人でも反對の聲の有たのを記憶してゐない。假令少の疑が生ぜし時にも、散會の前には了解して分れた。

一七四九年に發行されたる讚美歌集

一七四九年に弟が聖歌及び聖詩集と稱する二種の書物を刊行した、自分は夫れが發行せらるゝ前に見なかつた故に、彼等の或物に就ては承認する事が出来ぬ、乍併、潔めの問題に就ては、此歌集の要點を認容する、故に茲に數節を採録する。

主よ、來りて罪なき御身を現はし、惡魔の業を壊ち給へ、永遠の喜を充たしめ給へ、惠の聖顔をあらはし給へ、主の臨み給ふ事こそ、我が白晝なれ。とく來りて我を救ひたまへ。今この時をとらせたまへ。迷へる我心を家に歸し、全たく平和に保たせ給へ、あまねく地上を逍遙ふ事を許し給はず、きみの愛の虜として神のうちに囚へさせたまへ。

捕虜を放ち、平和をたまへ、さらば我が悲みと罪とは忽ち止まん。今其の時、我らの願をゆるさせ給へ、贖主。慰主なる主よ。

生れながらのこの罪より救ひて、今吾軛を碎き給へ、我をば永遠にきみのものとなさせ給へ。

我をして主の完き御性を分つ者と爲し、今こそ主にありて新らしき罪なきものとなさせ給へ。

主よ、今我を還し給へ、主の軛をわが靈に頂だかせ給へ。斯くして柔和と平和

なる心の寶を握らしめ給へ。

静め給へ、此苦める胸を、願はくは、かの第二の休息に入らしめ給へ、聖さに於て全うせられ、おのが働を永遠に止むる事を得しめ給へ。

此惠の時、聖國を我衷に建て、榮ある能力もて充たし、罪の種を斷ち切り給へ。きみ、罪人の爲に殺され給ひし小羔よ、來りて潔めの流を注ぎ、きみの力なる

御血もてわが汚れをことごと洗ひ給へ。内住の罪迄深く血潮を注ぎて、凡ての傷つさし靈を痊し、腐をことごとく潔め給

へ。希望の捕虜よ、立ち、汝の主の顯るるを仰げ、主は愛の翼に贖を齎らし給ふ。贖の血潮を湛へて、主は受けよと呼び給ふ。赦の神なる我に來り、信ぜ

よ、信ぜよ、と主は召し給ふ。イエスよ、見上げまつらん、凡ての殘の罪より潔められて生れながらの虐主

の軛を拒み、鎖を棄つるまで我は主を仰ぎ上らん。

古き我は、最早、私の支配者たらざるべし、信仰によりて我ら永遠の救の能力をいだくなる。

イエスよ、我生命よ、主と共に日々死ぬるわれらの衷に顯れ給ひ、私の完成者なる事を示し、生命の靈を注がせ給へ。

隠れたる秘密を開きて、第二の恵を與へ、我にも、待ち望む凡ての心にも榮の聖姿を示し給へ。

實に主は我平和、我力、至き救と豊けき愛とを味ふために、暗路にも恵の聖手我を保ち、惑の中にも近く在して支へ給ふ。

喜びのみ言葉を宣り、我儕に自由を宣り給へ。主よ、きみこそはわが爲の祝福を有ち給はずや。備へ給へる平和を今與へ給へ、愛よ、我心に天の聖國を開き

給へ。是等の聖歌集の第二版が、一七五二年に出版された、多少文字上の過失を正された外、何等の變更とはなかりき。是は今日迄、我儕兄弟が保持し來り

し所のものを表す故に左に抜萃せんに

(一) 基督者の完全とは、凡ての罪より救はれたることを含む神と隣人とに對する愛をいふ。

(二) この愛は唯だ信仰によつてのみ受け得る。

(三) これは一瞬間の内に、即ち、即時に與へらるるものである。

(四) これは我儕が臨終の時を待つ迄もなく、凡ての瞬間に期待すべきものにして、今こそ恵の時、此救の日である。

一七五九年に發行されたる基督者の完全に對する意見。

一九一七五九年の年會開かれし前、感情の相違より或危険が窺かに我儕の間に入り込み來つた事を發見した。因つて我儕は再び此教理に就て熟議し、直ちに

『基督者の完全に關する思想』と題して、左の諸言を附して小冊子を發行した。

此小冊子は決して何人の好奇心をも満足せん爲に企てられたものではない。或

は此教理を破壊し嘲弄する所の人々に對して教理を證明せん爲に書かれたもので
 もない。又此の教理に反對する多くの異端、夫れは随分嚴格なる人から提出され
 るかもしれないが、それに對する返答でもない。自分が此處に企てし所は此題目
 に對する自分の感情を告白し、我了解する所に從て、基督者の完全とは何を含
 み、何を含まざるかを言明しようと思ふにある、之に附け加へて、問題に關する
 數個の實際的見聞と教訓とを述べて見たいと思ふのである。

これらの思想が、問題の體裁に於て初に現れし故に、今も同じ體裁に從はうと
 思ふ、要する所余が二十年間保持した所の意見と同様である。

基督者の完全とは何ぞや

我心、我意志、我靈、及び我力の凡てを盡して神を愛する事である、これは左
 の事を含蓄する、即ち惡しき氣質、又愛に反する者は一切其魂の中に止まらぬ

事、又凡ての思想、行爲、言語、皆純粹なる愛によつて支配されることである。

『君は此完全が凡ての弱點、無知及び過失を除きたるものとせらるるか。』

『自分は常に全く其反對なるを告白し來つた。今後も同様であらう。』

『人が其凡ての思想、言語、行爲に於て純粹なる愛に支配せられ、尙ほ同時に無

知及過失に陥る事が出来るであらうか。』

『自分は此處に少しの撞着をも見ない、一人は純粹なる愛を以て充たされても、尙
 過失に陥る事が出来よう』と思ふ。實に此死ぬべき者が死なざる者を着る迄は、
 事實過失から遁れ得る事を余は期待しない。自分は、これは血と肉との中に魂
 が宿つてゐる自然の結果であると信ずる、凡て我儕の考といふものも、肉體の機
 關、即ち他の部分と共に弱さを苦む所の機關を経るにあらざれば、能はざる事
 ある故に、此朽つべきものが朽ちざるものを着る迄は、我儕は時々考を過つ事を
 防ぎ能はぬ。尙ほ此思想を進めて行くことが出来よう。判断に於ける過は實行に

過ちを起すかも知れない、例へば教育の偏見から生じた、デ、レンチイ氏が懐抱さるゝ禁慾の本質に就ての過ちが、實際の過誤を伴ひ起した、即ち彼が鐵の帯を帯びる如きである。斯様な例は假令惠の最も高き状態に進める人であつても起り得るかもしれぬ。ある、然れどすべての言語及び動作が愛から發する場合には、さういふ過ちはあらはな罪とは言へぬ、それでも如く此過ちは神の峻嚴なる審判を受くるに至らぬとは云へ、贖の血を要する事は勿論である。

一七五八年八月此題目に就てブリストルに會

合せし兄弟達の裁斷

其裁斷は左の三項目に分たれて發表された、

- (一) 人は凡て活ける間は、誤りを爲すかも知れぬ事、
- (二) 思想に錯誤がある時は、其實際の行に錯誤が生じ得る事、

(三) 凡て斯る過誤は、完全律に照らして背反である、

(四) 従て凡て斯かる誤も、贖の血なくしては永遠の刑罰に値する者なる事、

(五) 従て最も完全と稱せられ居る者も、キリストの贖を續て必要とする者である、彼等が事實犯せる罪の救を求めねばならぬが、他の兄弟の爲のみならず、おのれ自の爲にも主よ我儕の罪を救し給へと求めねばならぬ。

外の法にては、全く説明出來ぬと見ゆる事も、是にて容易に説明さるゝなり。即ち、最高程度の愛に就て話しても少しも反抗せざる者も、人が其實生活に罪なき生活を爲し得ると言ふ時は、承知せぬのである。此理由は凡ての人は、言動に於て、又判斷に於けると等しく實際に於て過に陥り得るものなる故に然か信ずるのである、乍併此人々の知らぬ事、又考へぬ事は若し愛が其行動の全主宰であるならば、之れは過ちであつても、罪と稱すべき者でないと言ふ事である。若し其人々が罪を犯さぬならば、其人々の爲には仲保者の必要はないであらう

か、尠くも祭司としてのキリストを要せぬ事が明白ではあるまいか。

決してさうでない、恐らくは之等の人々ほど、キリストの必要を感じずる者はなく、全くキリストに依存するものはあるまい。何故なればキリストはキリストを離れてゐる魂に生命を與へるといふことはなく、キリストのうちにキリストと共にある者に與へ給ふのであるから、如何なる恩寵の程度に、彼等が進むとも「枝もし葡萄樹に連らざれば、自ら果を結ぶ事能はず、爾曹も我に連らざれば又斯くの如くならん、爾曹我を離るゝ時は何事も爲し能はざるなり」といふ御言葉はすべての人に取つて眞實である故である。

全く潔められし者も贖ひを要する事

如何なる状態に居る者でも、我儕は次の理由に因て、キリストのを要する。

- (一) 我儕の受くる凡ての恩寵は、キリストよりの自由の賜物なる事。
- (二) 我儕は主に買れし者として、彼の拂ひ給ひし代償の故にのみ恩寵に與る。

(三) 我儕は主より此贖ひの恩寵を受くるのみならず、其の御恩寵を主御自身の内に受くる者である、抑も我れ儕の完全なる者は、樹が自分の根から吸上げる液汁に因つて繁茂する如き者といふよりは、先にも言へる如く、葡萄の枝が幹に連り居る爲に實を結ぶが如きものにて、若し其の幹から離るれば枯れて凋むのである。

(四) 凡て我儕の受くる恵は現世的のものも、精神的のものも、亦永久的のものも、皆全く主の仲保に依つて與へらるものである、是は主の祭司職に依れる恵の一部なるが故に、我儕は皆一様に主を要する次第である。

(五) 最も善と稱せらるゝ人も尙ほ祭司としてキリストを要す、其の手落、仕損じ或は其判断、實行の過誤、其他種々の缺陷の爲に要する。是等は皆完全律より見て外れたる事である故に贖を要する。「愛する者は律法を全うす、愛は律法を完全す」(羅十三ノ十)との聖句よりして、是等は本統の罪でない事が分る、過失及び

腐敗し易き肉の状態より必然發出する處の弱點は、何の道から言つても、愛に反對とは言へない故に、聖書の意義に於て罪と斷ずる事は出來ぬ。

無意識の違犯と罪過無き完全

此點に於て今少し進んで自分の意見を説明すると

(一) 唯正しく罪と呼ばれたる罪(即ち知れる法律を有意識に犯す事)のみならず、不當に罪と稱せられて居る者(即ち知る知らぬに關らず神の律法を無意識に犯す事)是等も皆血の贖を要する。

(二) 是等無意識の違犯をも除きたる完全といふ者は、地上に無事を信ずる、如此違犯は死ぬべき者に免るゝ事の出來ぬ無知及び過失の自然の結果であると解す。

(三) 故に無罪の完全と言ふ言葉は、自ら撞着になるかも知れぬから、自分は用ひぬのである。

(四) 自分は信ずる、人が神の愛に充たされて居つても、尙ほ此無意識の違犯を爲し易し。

(五) 斯かる違犯を、諸君が罪と呼べるゝならば、夫れは自由であるが、自分は以上の理由に依て罪とは呼ばぬ。

『之を罪と稱する人と、稱せぬ人とは如何なる注意を與ふるか。』

『是等を罪と稱せぬ人に對して、注意すべき事は彼等は仲保者なしに無限の審判者の前に立ち得状態にありと思ふが如き事なかしめる事である。是が出來ると思ふならば、夫は深き無知か、尊大な誇か、若くは憶斷であると言はねばならぬ。是等を罪と稱する人々に注意すべき事項は其人々が此過失と、當然罪と稱せらるべきものと混同せぬ注意を要するとの事である。』

如何にして此混同より免るゝ事が出來るか。若し凡てを雜然罪と稱するならば、如何にして區別するか。反つて恐るゝ事は、此結果、完全の人にも罪があると承

無意識の違犯と罪過なき完全

認するならば、遂に多くの人々は罪といふ意味を實際まぬかれぬ過失に限らずに、眞實の罪もゆるすやうにならう。』

『完全なる愛と、過失を爲すと言ふ事と相容れる事が出来るか、若し人が完全なる愛に達する時には、各瞬間それに依つて支配さるゝ者ではないか、又過失といふ者が純粹なる愛から發生し得るか。』

『之に對して言ふ、

(一) 過失と純粹の愛とは、相伴なふ事が出来る。

(二) 或物は偶然發生する。愛夫れ自身が、我等を過誤に傾かす事がある、例へば隣人に對する我儕の純粹の愛は惡を考へぬ者である、即ち凡ての事信じ且つ望むの愛であるとする、此性質夫れ自身疑ふ事なく、凡ての人の最善を信じ望むの心より我儕の考が其人が眞實値するよりかも、更に高く考る事になるかも知れぬ。此所に明かに純粹の愛より發生する、明白なる過失がある。』

『如何にして完全といふ事を、高過ぎもせず、又低過ぎもしない程度に考量する事が出来るか。』

夫れは聖書に照らして考量し、之を聖書の示す高さに置く事である、神と人に對する純粹の愛、我等の全身全靈をもて神を愛し、又自身の如く障人を愛する事より高くも無く、又低くも無い筈である。夫れが其人の心と生活とを常に支配し、凡ての性情、言語、行低を一貫して居る處の愛である。』

聖潔を告白する事に就て

『或人が聖潔に達したと假定する時に、君は彼に夫れを告白する事を勧めらるゝか。』

『最初は大水の如くに、自身を運び給ひし神のいつくしみを語る望の火が内に燃えて、止むに止まれぬ思がするであらう、乍去後には夫れを制する事が出来る。』

聖潔を告白する事に就て

其の上に注意すべき事項は、神を知らぬ人に夫れを語らぬ事である、(大抵此種の人を激せしめて反対せしむるか、又は不敬に陥らしむる)他の人に對しても特別の理由なくば、或は其處に徳を立つる見込がないならば、語らぬがよい。それから決して高慢にも見えないやう特に注意しつつ凡ての榮を神に歸し最も深い謙遜と敬虔とを以て語るべきである。』

『然らば、全く黙して少しも語らぬ方が善くはあるまいか。』

『沈黙に依つて多くの困難を避け得る、此處に言ふ所の困難は、信者の間に於てすら、神が彼の靈魂の爲に爲し給ひし處のものを、單に語つても自然或は必然に發出し得る所のものである、夫れ故に血と肉とに其人が相談するなれば、全く沈黙を守る事となる。乍去是は明敏なる良心に照らしては出來ぬ事である、何となれば、疑もなく、彼は告白すべき義務がある。夫れは誰でも燈をともして柵の下に置く者はない、況んや神をやである。神は決して凡ての人の前に隠す爲めに力と愛との記念碑を建て給はない。寧ろ其恩を以て、單純なる心の人に與へらるゝ一般の恩寵として與へ給ふ。故に主はこれを以て單に其人一人の幸福と爲さないで、他の人をも動し勸めて同じ恩に入らしむる爲にと企て給ふ。主の聖旨は「多くの人が夫れを見て喜び」主を信ずるに至らん事である、自己より高き救を握つて居る人と語るより以上に義とせられたる人の靈魂を鼓舞するものは地上にない、此種の證言が人をして救の意味を了解せしめ、從て之を獲得せんと渴き求めしむる様になる、若し救はれたる人が救を隠して沈黙を守つて居るならば、人を其處に導く事は出來ぬ。』

『斯る救を語る人が、常にふりかゝる困難より逃るゝ途はあるまいか、』
 『信者の心に生れ附の儘の性情が残つて居る間は、之を全く禦ぐ事は至難の事である、乍去若しも傍より傳道者が努むる所あらば禦ぐ道がある、夫れは、』

(一) 我は全く救はれて居ると語る所の、凡ての人々と自由に交り互に了解する

聖潔を告白する事に就て

事。

(二) 斯様に語るべき相當の證據あるものが、不義、不當の取扱を受けない様に保護に努むる事である。」

全く潔められたる證據

「相當なる證據とは何ぞや、如何にして人が凡ての罪より潔められたる事を確實に知り得るか。」

「靈の超自然的明智を神より與へらるゝに非れば、人が斯の如く全く救はれてを其處に理解力を有する誰にでも充分なる證據と認めらるゝものがある、又此の聖き御業の眞實なる事及其の深さに就て少しも疑ひを挟む餘地なきものがある。」

(一) 若し其人の生活に於て、變化の起りしと云はるゝ以前、或る時期の間續ける模範的言動の有りし事を明確に認める事が出来るならば、此人は決して神に對して虚偽を言はず、從て自身の經驗に就ても正直に語る人であらうと言ふ事を信ずる理由となる。

(二) 若し其人が此變化の起りし正確なる時及其状態に就て反駁を許さぬ程明白なる言葉を以て語るならば信ぜねばならぬ。

(三) 若し又其の人の變化後の言動が聖く、過ちなきものであるならば、信ぜねばならぬ。要する所左の三點に歸すると思ふ。

(一) 此人は虚偽を云はぬ人であると信ずる充分の理由ある事。

(二) 彼が神の前に證して、我は罪を感ぜぬ、唯愛に充たされて在ると、又絶えず祈り、悦び又感謝して居ると言ひ、又

(三) 我は全く新たにせられ、又義とせられてあると言ふ明白なる内心の證據を

全く潔められたる證據

有すと云い、其時我儕に於て此明白なる證言に對して、何等反對すべきものを有たぬならば道理上之れを信せねばならぬ。

(但し斯の如き人でも過に陥ると言ふ事を否認する理由はない、凡て肉體にあるものは、過ちに陥り易い、又判断に於て過つ時は從て實行に於ても過つ事あるを認めねばならぬ。斯る事の無き様、充分注意を拂ふにしても、人は尙過を免かるべからざるものである。假令愛に於て全うせられてをる人であつても、他人に對して過を爲す事がある、例へば或一事に就て、他人の過失を事實以上に、或は以下に信じて、其人に對する取扱が或は過酷に失するか、又は寛大過ぎるに至るかも知れぬ。此意味に於てヤコブの(是はヤコブのもとの意味ではないけれども)所謂「我儕多くの事に、過ちを爲せりと」いふ事が解せられる。其故に、これはかく云ふ人が完全でないといふ證據には少しもならぬ。

「乍併、若し其人が音響、倒跌、或は不意の危険の爲に、驚かざる、か、或は

亢奮する様な事があるならば、夫れが完全でない證據にはなるまいか。」

夫れは其印にはならない。或は驚き慄き、又顔色を失ふ等、其外身體に異状を起すにしても、其魂は神に靜かに止まつて、完全なる平和に止まる事が出来る。M.

假令心は深くなやみ又非常に悲み、當惑し、苦み、煩悶し、或は困憊することはあらうが、精神は完全なる愛に依りて、神に倚り繋る、そして其意志は、全く神に信賴しまつる事が出来る。神の聖子御自身のもかうではなかつたか。誰か人の中に、キリストの如く、患難、苦痛に逢ひしものがあるか、然るに尙ほ彼は罪を全く知り給はなかつた。

「深き心情を有てる人にして、美食を擇むたり又餘り必要でない快感を求むる様なことがあるか、若し然らば他のものと比較して相違がない様であるか如何。」

「快き食物を求むる點に於て、清められたる人と他の人との間には左の如き相違

全く潔められたる證據

がある。

(一) 清き心情を有てる者にとつては、自分の幸福の爲に夫れ等のものを缺くべからざるものとしなさい、彼等は別に内心に幸福の泉を有して居る、彼等は神を見又神を愛する故に、常に悦び、又凡ての事に感謝する。

(二) 彼等は美味を用ひはしうけれども、これを求めはしない。

(三) 彼等は慎みて之れを用ひる、決して美味其物の爲に求めぬ、以上を前提として、更に直接に言へば、「潔められたる人に取つては、然らざる人が出遇ふ所の危険なしに美味を用ふる事が出来る、それが若し何方も健康上よろしき食物である時彼は我儕を悦さん爲に凡てのものを豊かに與へ給ふ神にのみ對し、一層感謝の道として、快き食物を擇む。同じ原則に於て、彼等は花の香を喜び、又葡萄の一房を喜び、其他の喜ばしき物を取る、これは凡て神に於ける彼の悦を増さむが爲である、夫れ故に我等は愛に於て全うせられたるものは結婚する事が出

來ぬとか、或は世俗的の事業に携はる事が出来ぬとは言へぬ。若しも世俗的の事業に召されるならば、以前よりも更によく出来る筈である、何故なら躁急なる事無く注意し、少しも心に取亂すことなく、萬事をする事が出来るからである。

「若し二人の完全なる基督者より、子が生れるとする時に、兩親共罪のない人なのはどうして其子供は罪の内に生れたと云へよう」

「それは可能の事である、然し事實上恐らく有るまい。未だ嘗て左様な事があつたか、又將來にも起るかを余は疑ふものである。それは扱ておき、「罪といふものは直接の傳統に由るに非ずして、我々の第一の祖先より繼承したものである。」一人の不順によりて凡ての人が罪人とせられた、即ちアダムが禁じられたる果物を食ひし時に、彼の生殖力の内にありし凡ての人は、一人も除かず罪人とせられたのである。

これは我等の菜園に於て、著るしき事例を見る事が出来る、濫い小さな林檎の生る樹に接木をすると甘い林檎が生る。けれどこの林檎の種を蒔いて見る時に結果は如何。生ずる所のものは、前と同じ濫い小さな林檎に外ならぬ。』

再生したる者及び全く潔められたる

再生者の外的生活に就て

『完全なる人が他の人に比して、如何なる事を更に多く爲すか、或は普通の信者に比較して更に多く爲すか。』

『多分相違がないかも知れぬ、神の攝理は、外面の事情に於ては、眞の彼を隠し給ふかも知れぬ、即ち他の人と比較して、多く違はないかも知れない、假令彼が神の爲に暮し、用ひられん事を希望し、渴望すとも、尠くも外面には顯はれぬ。彼は非常に多くを語らず、又非常に多くの事業をせぬ。恰も主イエス自身が多く

を語り給はず、多くの仕事をし給はざりしと同じである、弟子の或る者の如く、主が大なる業を爲し給はざりし事は、約翰傳の十四章十二節にある通りである。然り、外面の事情をのみ見て人が神の恵を多く有つて居らぬ證據にはならぬ。神は外側の働をその人の衷に有る恩寵によつて測り給ふ、主の聖言に、「誠に我爾に告げん、此貧しき寡婦は他の凡ての人よりも、多くを入れたり」と、眞に此哀れなる人は、彼の僅かなる言を以て他の凡ての人よりも多くを語つた者である。誠に此貧しき婦人は冷き水の一杯を興へて、他の凡ての人よりもより多くを爲した者である、我儕は見ゆる所に従つて鞠く事を止め、正しく鞠く事を學ばねばならぬ。』

『若しも其語る言葉に、又祈禱に力がないならば、これは潔められたる人に對して、反對の證據ではあるまいか。』

さうではない。或は見る卿の過かも知れぬ。人の内の力を知るといふ事は、そ再生したる者及び全く潔められたる再生者の外的生活に就いて

れを妨害するものが間にあれば不可能である。

(一) あなたの魂が死んで居るならば。恰も死せるパリサイ人は、「未だ嘗て斯くの如く語りし人あらず」と云はれたる主の言葉の内にはさへも力を感ぜなかつた。

(二) 或る未だ悔い改めざる罪の咎が、良心に横はつて居るか。

(三) 其人に對する或種の偏見があるか。

(四) 其人が達し得られると言明するその状態をあなたが信ぜぬか。

(五) 彼がそれに達したといふ事を考へ又は認めることを欲しないか。

(六) 其人格を過大視し、或は偶像視するか。

(七) あなた自身が自身を或は自分の判断を過大視するか、若し之れ等の事實の一があつても、先方の言ふ力を感ぜぬ事が出来ぬといふ事に就て不思議はない。

他に同じ人に就て力を感ぜぬ人があるまいか。若しあるならば、卿の議論は地に落ちてしまふ譯である、又若し他にないならば、右述べし障害は一つもないのか。兎も角も議論を立てる前に、此事實に就て明確に取調ぶるを要する。假令其議論が立つにしても、恵と賜とは必ずしも並行するものでないと言ふ事を證するに外ならぬ。

乍去、彼は未だ、完全なる基督者てふ我理想に達して居らぬと卿は言ふか。多分さういふ人は一人もなかつたらうし、又將來もあるまい。如何となれば、卿の思想は聖書の標準を越ゆるか、或は少くとも外れて居るらしい。其理想が聖書が意味するよりも、より多くを含んで居るかも知れない。或は聖書が含んで居る所以外の或物を加へて居るかも知れない。聖書の完全とは、純粹なる愛が心を充たし、而して夫れが凡ての言葉と、行動とを支配する事である。若しあなたの思想が之れ以上か、若しくは其他を含んで居るならば、夫れは聖書的ではない。然らば聖書的に、完全な基督者があつても、あなたの理想に達しないと言はるるに

義させられたるに對しての如く、完聖に對する聖靈の明白なる證ある事

不思議はない。

此の躓く石の爲めに、多くの人が躓づいて居ることを恐る。彼等は完全な人といふ彼等の理想に、聖書にでなく、彼等自身の想像に従つて内容を増加する。此の想像せる理想に照らして、適はざるものは、容赦なく拒絶するのである。

我儕は常に、我儕の眼の前に單純なる、聖書的標準を保持する様に注意せねばならぬ。純粹なる愛のみ、其心と生活とを支配する、これ聖書的完全の全體である。』

義とせられたるに對しての如く、完全に對する

聖靈の明白なる證ある事

『何時人は成聖に達したと自ら判定する事が出来るか。』

『彼が義とせらるる前に經驗せしものよりも、更に深く又明白なる確信を以て、生れ乍らの罪に就て、自覺せしめられ、又罪の自然に消滅して行くを實驗せしめられたる後、進んで罪に就ては全く死にたるもの、又神の愛と像とに全然再生したるものとなり、常に喜び、絶えず祈り、凡てのこと感謝するに至りし時、是れが証明である。唯だ凡てに於て、愛を感じ、又罪なきものとされたるを感ずる感情丈では充分なる証明とはならぬ。少數の人は、其の魂が全く再生する以前でも少時の間これを實驗するものもある。故に、聖靈の證が成義に對してと同様に彼の全き成聖に對して明白に證明する迄は、其の業が完成したと信じてはならぬ。』

我々が完聖されたご欺されるかも知れぬ

『事實成聖されてゐない時に、成聖されたりと想像する人がある。是れは何故

我々が完聖されたご欺されるかも知れぬ

か。」

「其故は、彼等が以上の標準によらずして、其一部か、或は不徹底なる他の標準によつて決定せんとするからである。然し乍ら自分の知る所に於ては、事實完聖に達して居り乍ら、詐られて居る人はない。自分はさう言ふ人は世間にある筈がないと思ふ。若し人が義とせられたる後、生れ乍らの罪に就て、深き充分なる自覺を有する時、又罪の漸次に滅び行くを實驗し、其後神の像に全然改造される時、又此の變化に就て彼が義とせられたりし際に覺えたるよりも遙かに大にして明白なる又直接なる證が加はる時、自分は斯かる人が此の點に於て、欺かれてゐると信ずる事は出来ぬと斷定する。夫れは恰も神が詐り給ふと信ずる事が出来ぬと同様である。更に此の人が眞實の人であつて、そして此の事を世に證言したと知るならば、充分なる反對の理由なくしては、此の證言を拒絶すべきでない」

501

成聖は漸次的か、又即時的か

「罪に對する此死、又愛の中に再生すると云ふ事は、漸次に爲さるるか又即時であるか。」

「人は幾らかの間死につゝある状態にあるとはらうけれど、正確にいへば魂が肉體から離れる迄は死なないので、其瞬間から眞に彼は永生の生活に入るのである。同様に人は幾らかの間罪に對して、死につゝある状態になることはあらうけれど未だ全く罪に死んでゐるのではない。罪に對する眞の死は、罪が彼の魂から離れる迄來らぬ。其瞬間以後、愛の充てる生活をするのである。肉體の死する時に生ずる變化は嘗て我らが知りし所のものよりも更に大きく、又全然異つたものであつて、其時に非ざれば考へる事さへも不可能である、其如く魂が罪に對して死ぬる時に、齎さるゝ所の變化は過去の凡ての變化よりも、更に大きく、又全

成聖は漸次的か、又即時的か

く異つたものにして、夫れを實驗する迄は、誰も豫想する事さへも出来ぬものである。斯くして後も尙ほ彼は、恵みに成長し、キリストの智識に進み、神の愛と御像とに成長する事が出来る。そして唯だ肉體の死する迄進歩するのみならず永遠に其道に進むものとなる。

『如何なる態度に於て、我々は此變化の來るを待つべきや。』

『不注意なる無頓着、或は怠慢より生ずる不活潑なる態度でなく、元氣に全的服従をなすこと、凡て神の命令を熱心に保つこと油斷なきこと苦心すること克己して、日々其十字架を取ることに於て待たねばならぬ。熱心に祈り、又斷食し、神の凡ての命令を嚴守しつゝ待たねばならぬ。若し誰でも外の方法で得らるゝと思ふか。(或は、夫れに達した時若くは大抵夫れに達したと思ふ時に守れると思ふならば)。彼は自身の魂を詐るものである。單純なる信仰によつて我々がそれを受取るといふ事は眞理である。乍併神の命じ給うた方法によつて我々が精力を盡して夫を求むるに非れば、其信仰を興へ給はざるべく、又興ふる事を好み給はぬ。此事實は、此恵を受けた人々はなぜそんなに少數かと尋ぬる人々を、満足さすと思ふ。幾何の人が以上の方法に於て、夫れを求めつゝあるかといふ事を尋ぬる時に、充分なる答を發見する。

特に祈禱が缺けて居る。誰が此點に於て祈り續けて居るか。誰が此目的の爲に神と角力しつゝあるか。彼の「爾求めざるによりて得ざるなり、或は爾過つて願ふ故に得ざるなりとは多く人の實驗である。例へば死の前に更生さるる事を許し給へと祈る如き過である。

死の前と言ふか、夫れで其人は満足であらうか。何故今爲し給へと願はぬのであらうか。今日と呼ばれてある間にと願はぬのであらうか。斯の如き態度が神に向つて時間を此方から制限するものであると思つてはならぬ。確かに明日か主の時であると同様、今日こそ又主の時である。急げ、人よ急げ、「完全なる恵を實驗

する爲に、爾の魂をして強き希望を以て叫ばしめよ。愛に溶かされん爲に、爾の慕ふ心を全く熱せしめよ」と歌はれてある。

「我々が愛に於て完成さるゝまでは、得たる平和と喜悅の状態を續け得ないだらうか。」

「確かに我々は續け得る。如何となれば神の王國は、其自身互に分裂さるべきものでない。信者は常に主に於て喜び得る事に就ては、失望せしめてはならぬ。最も、尙ほ我々は我衷に残つて居る所の罪の性質に就て鋭く苦しむ事がある。又其苦痛から逃れんと強烈なる欲求を保つ事がある。是は我々にとつて善き事である。此感じは遂に一層熱心に我儕の強き助力者に向つて飛び行き、又一層熱心に、キリスト・イエスによりて上へ召し給ふところの褒美なる標的に向つて進まんとする激勵となるのである。我々の罪の感じの増す所には主の愛の感じも愈々増す者である。」

完聖に達したご自ら云ふ人を、如何に取扱ふべきか

「完聖に達したと思つて居る人を、如何に取扱ふべきか。」

「斯かる人に對しては、率直に取調べ、殊に神が其人の心の中にある所のもの凡てを示し給ふ様、熱心に祈る事を奨めねばならぬ。新約聖書全體を通じて教へられてある事は、恵みの最高程度に達せる人々も尙ほ益々凡ての恵に充たさるゝ様、又凡ての惡事に遠かる様充分に注意する事を熱心に奨勵してある。乍併是等の注意を興ふるにも、最も柔和なる態度に於て爲し、其人に對して、無情、嚴酷、或は意地惡等の態度が少しでもあつてはならぬ、怒とか不親切とか、或は輕蔑の様子があつてはならぬ。さう試みるといふ事は、サタンに任して置いてよ。彼の柔和と忍耐とを證明する爲に我儕をして意地惡と苦しみを以て、彼を試験せしめよとの叫は惡魔の子をして言はしむるもので、敢へて我等の態度であつて

完聖に達したご自ら云ふ人を如何に取扱ふべきか

はならぬ。若し潔められてゐると思ふ人が、與へられたる恵に對して忠信である以上、死ぬまで續いて認れる考を有つてゐるにしても亡びるなどの危険はあるまらう。』

「潔められたりと思へる人を苛酷に取扱ふ事が如何なる害を及ぼすか」

「それは其人が過てるか否かである、若しも其人が過てゐるならば其人を苛酷に取扱ふことは其魂を害ふ事になる。これは不可能の事でもなく、又有り得べからざる事でも無い、此事が其人を怒らしめ、失望せしめ、沈んで最早起ち能はざるに至らしむるかも知れない、若し其人が過つてゐないでも神が悲ませ給はぬ所のものを悲ませ又我等自身の魂を多く害する事となる。疑もなく彼等に觸るゝ事は、神が腫の如くに愛して居らるゝ者に觸るゝことゝなる。神の靈に充たされた人にして、人に對して不親切又輕蔑せる言動をするならば、尠なからず恩寵の聖靈を蔑視する事となる。之れによつて我々自身の内に邪なる憶説又多くの惡

しき性情が成長する事を感じる。唯だ一例を擧ぐれば、我々が神の此深き御業に對して、絶對的裁決力を有する審判官の地位に自分を置くといふ事は、何といふ自己過信の業であらうか。凡ての事柄に於て、どれが過誤でどれが罪を區別し得られやうか。あらゆる事情に於て、どれが全き愛に叶うて居るとか居ないとか定められやうか。又我々は、過誤がどれだけに人の容貌、態度、聲の調子に影響しをるかを嚴密に量り能ふか、假令我々が出来るとしても、到底我儕は人間である、我等と共に死する所の知識を有するに外ならぬ。

「潔められたと思ふ人を我儕が信ぜぬといふ時に、夫れが爲に其の人が不満を抱くならば、之れは潔められてゐない充分なる證據ではあるまいか。」

「其不満の性質によつて定めらる。若し其人が怒るならば、夫れは潔められざる證據であるが、若其人が悲しんで居るのであるならば、それは證據とならぬ。我々が神の眞の業を信ぜず、それから受け得らるゝ所の特權を放棄するならば其人は悲

むのが當然である。此悲みと怒りとは、兩方の外貌が相似てゐるが故に過ち易い。』
『完聖に達せずして、達したと想像して居る人を、發見す事は善き事ではあるまいか。』

『柔和と愛とを以て、試験をする事は善き事である。乍併摘發したからとて、凱旋でもした様な態度をとる事は善くない。斯様な場合に、恰も我々が大きいなる獲物を得たかの如く、喜ぶ事は非常に悪しき事である。寧ろ我々は深き同情と涙とを以て悲まねばならぬ。此處に神が人を全く救ひ給ふ其神の力の活ける證人があるかの如く見えしに、それが我々の期待せし者と相違してゐた。彼を量にかけた時缺けた所を發見せしとて夫が何の喜ぶべき事であらうか。若し此反對に、我々が此人に、唯々、純粹なる愛の外何物をも見出さぬ時には、前記の喜に優る千倍の多き喜を有するはずではないか。』

『若しも彼が自ら偽られてあるとするならば如何。』

それも其人の心の中に、愛の外何物も感ぜぬ間は無害の過ちである。之れは過ちとは云へ、普通大なる恵即ち潔めと幸福との兩方に於ける、高き程度の恵みと稱せられたる過ちである。之は單純なる心を持つ所の人々に對しては、眞の喜びである。勿論過失それ自身が喜びではないが、それに伴ふ、暫くでもそれに伴ふ所の、高き恩よりの喜びである。余は此魂が常にキリストの内に幸福であつて、常に祈りと、感謝に充ちて居る事を喜ぶ、又喜ぶ事は、彼に少しも清からざる性情なく、唯だ常に神の清き愛を感じて居る事である、若し斯くして最後の時まで、罪が停止されてあるならば、更に喜ぶべき事である。』

人が斯の如く欺かれてある時に、其處に何等の危険もあるまいか。』
彼が罪を感ぜぬ間は危険がない。但し曩に危険があつた如く、彼が新らしき試に出遇ふ時に再び危険がある。唯だ愛によつて、彼の凡ての思想、言語、行動が支配されてある間は、少しも危険がない。唯だ幸福で、安全で、全能者の影にあ

深められたりと思へる人を苛酷に取扱ふ事が如何なる害を及ぼすか

るのである。出来る丈け永く、其愛の中に續けしめよ。最も是と同時に、若し彼の愛が冷えて、罪が活き歸るならば、望みを棄てなければならぬ危険ある事、尚ほ又、未だ潔きに達して居ない故に、此儘ならば將來も達する事の出来ぬ危険のある事を警戒せねばならぬ。

「若し一人も未だ達して居る者が無いとするならば如何。又達して居ると考へて居る者も欺かれて居るとするならば如何。」

「第一之れが萬一眞理であると自分に證明するものがあつたら自分は尙更に此の教理を説教しよう。或る一定の人、即ち此の人彼の人を臺として、信條を建てたのではない。或人は欺かれてゐるかも知れないけれども、其の爲に自分の態度は決して變化しない。然し若し一人でも未だ完全に達した人がないならば、神は決して自分を完全の説教をする爲に、お遣はしにはならなかつたと思はねばならぬ。」

50

例を擧げて云へば、多年自分は、人の凡て思ふ所に過ぐる神の平安といふ事に就て説教して來た。誰か出で、此言は無用になつた、未だ嘗て此平安を得た者もなく、今日之れに對する活ける證人もないといふ事を得心さすならば、自分は之を教へる事を止める。

「けれ共、實際此の平和を以て死んだ人が數人ある」或はさうであるかも知らぬ。然し自分の要する所の者は活ける證人である。勿論此の人或は彼の人を指して、確かに間違のない證人であると言ひ難いけれども、若し斯の如き人が實際一人もないとするなれば、自分は此信條を棄てねばならぬ。

「卿は私を誤解して居る、自分は或人が此愛の内に死し、又其死の前長い間、それを以て喜んで居つた事を信ずる、乍併其人の死の前或時間迄は、前の證言が眞實でありしや否やに就て、自分は確かでなかつた。」

卿等は其時ですら絶對な確信を有して居られぬ。然し相當の確信さといふ事

深められたりと思へる人を苛酷に取扱ふ事が如何なる害を及ぼすか

を、嘗て経験されたであらう。其確信は卿等自身の魂を勵まし、慰め、又其他の基督者としての用を達せしめたであらう。若し一人でも活ける證人があるとしたならば其人と誰でも誠實な人は神の愛と畏との中に一時間話しをすることによつて此程度の確信を有する事が出来る。

『聖書が之れに就て證明する以上は、達した人があらうとなからうと構はないではないか。』

『若しも英國中に於て、如斯明白に、又強く、多數の教師に由つて、又多くの場所に於て、又長き時の間、教へられた所の者を實驗した者が一人もないといふ事が解つたならば、是は自分に取つて、聖書の意味を、我々凡てが誤解したと明白に説得せられたものである。故に其場合には暫くの間、自分も亦罪は死際まで残るものであると教へねばならぬ。』

一七六二年ロンドンに起りし熱狂

二〇、一七六二年に、ロンドンに於て、神の聖業の大なる發現があつた、今日迄斯かる事に少しも氣を止めなかつた多數の人が、此事に由て自分等の亡びの狀態に就て、深く悟らせられた。多くの者がキリストの血の中に贖ひを發見した、又尠なからざる墮落者が救はれた。そして可なり多數の人が、神は凡ての罪より彼等を救ひ給ふと、確信に達した。此時余はサタンが小麥の間に稗、燕麥を蒔く事を努むるであらうといふ事を思つたから、此危険に就て彼等を警戒し、殊に誇りと熱中とに就て、注意を與へる事に苦心をした、余が都に止まつて居る間は、此人々が謙遜で、眞面目な心を持ち續けて居ると信ずる理由があつた。けれど余が出發するや否や熱中が始まつた。二三の人は自分らの想像を、神からの示したと思ひ自分らは決して死なないと考へ、他の人々を同じ意見に引き入れんとして、

騒ぎと混雑とを起したのである。間もなく此の人々と外に少数の人々が極端に走つて、最早彼等は誘惑にかゝらぬとか、又豫言と、靈を辨へる賜とを賜つたと考へた。秋ロンドンに歸つた時に、最早苦痛を感じないとか、或者は訓戒を聞き容れたが、或者は取あはうともしなかつた。之れと同時に非難の聲が諸方面から達して來た、此人々からの非難は、自分が凡ての場合に彼等を制止しつゝあると云ふ事で他の方面からは自分が彼等を制止せぬとの非難であつた。兎も角も神の手は止む事なく擴がつて次第々々に多くの罪人が悔改めて來た。神に對して悔い改める或者が、毎日起ると同時に或者は又凡ての心を以て、神を愛する事の出来るものとせられた。

二一、丁度其頃ロンドンから少し遠方に住んで居る。一人の友人から次の様な手紙が達した。

「基督の小麥畑に、サタンが燕麥を蒔く事を恐れ過ぎてはならぬ、是は今迄も常に有たことで、殊に聖靈の著るしき傾注があつた時に左様である。又將來も彼が一千年の間、鎖に繋がれてある迄同様であるであらう。其時の來る迄、サタンは何時でも基督の靈の御業を模倣し、妨げやうと勵むであらふ。

此一つの悲しむべき結果は、惡魔の腕に常に眠つて居る社會が、聖靈の凡ての働きを嘲けるといふ事である。

されど、之に對して眞正の基督者が何を爲し得るか、若し彼等が價值ある相當の働きを爲さんとするならば。第一に凡ての迷はされた魂が救はるゝことを祈り。第二に柔和な精神を以て熱狂者を引き返さんと努め、最後に、祈りと警戒とを以て、最高の注意を拂ふべき事は、他人の迷想の爲彼等自身の魂と、肉體と、精神との全體の潔め、即ち是れ無しには人が神を見る事の出來ぬものである所の潔めを求むる彼等の熱心を減少せしめぬ様にと努むる事である。

實に此全く新らしき被造物は、狂へる世界の眼には必竟狂人である。乍併兎

も角も夫れが神の意志であり、又智慧である。凡て我々は彼等の貴き賜物を求むべきである。

此信條を極度に保持して居る所の人は、屢々神の全能を限る所の罪に陥る。神は聖旨のままに賜物を與へ賜ふ。夫れ故に人が潔めの靈の高き程度に達し得る爲には、其前長い間信者であらねばならぬと定める事は、智慧でもなく、又謙遜にもならぬ。

神の用ひ給ふ普通の方法もあるが、彼の主權を用ひ給ふ方法は別である。彼には其業を早くし、遅くするに、兩ながら賢き理由を有ち給ふ、或時は不意に、そして期待せられざるに來り給ふ事がある。或時は我々が永く待ち望む迄來り給はぬ事がある。

實に、多年自分は考へつゝあつた、それは人が其の神的生活に於て、何故左様僅かな進歩を爲すのみであるかの大なる原因の一は、彼等自身の冷淡、手落ち、不信に由ると云ふ事である。しかも是は信者に就て語つて居るのである。願はくはキリストの靈、凡ての事に於て我儕をしてし正しき判断を爲す事を得しめ、神に充てる凡てのものを以て我儕を充たし、斯くして我儕が完全に、圓滿に、何物も缺かぬ者となり得たいものである。

二二、之れと丁度同じ頃、五六人の正直なる熱心者が、此世界は二月の廿八日に終りが來ると豫言した。自分は直ちに彼等に抵抗した。公私何れに於てもあらゆる方法を以て反對した。自分は公然此の問題に就て、ウエストストリート及びスピタルフキールドの兩所で説教した。自分は度々團體に警戒を與へ、又個々に就て話をして自分の働きの果を見るに至つた。彼等は極めて僅かな附隨者を得たのみであつて、自分の信する所では、我儕の全團體の中で漸く三十にも足らないと信する。乍去彼等の騷擾の爲に、凡ての事に於て極度に自分に反對する者に多大の機會を與へた、又之に依て基督者の完全に反對する所の人々の數を増加し、其

人々に勇氣を興へた。

現世に於て完全に達し得ぬとする人々に對する質疑

二三、夫れ等の人々の一人によつて提出されたる質問が、左の事を書く様に自分を導いた。

現世に於て完全に達し得る事を否定する人々に對し

て謙遜に提供する質疑

(一) ユダヤ教の下に於てよりは、福音時代になりて、聖靈の更に大なる降臨があつたではないか。若し然らざれば、キリストの榮められざる前に降らざりし靈とは如何なる意味か(約七ノ三九)

(二) ペテロ前書一ノ十一にあるキリストの受け給へる苦難に附從せる榮光とは外部的の榮光か、將た内的か、即ち完聖の榮光なりしや、否。

(三) 聖書の何處に、神が我等に命じ給ひし命令にして、其命令に優れたる約束の添はざる者ある乎。

(四) 完聖に關する神の約束は、現世に於て充たさるべき者か、或はたゞ來世に於てか。

(五) 基督者は神が「我儕の心に銘さん」と約束し給ひし律法以外に、何か他の律法の下に束縛されてあるものなるや、エレミヤ卅一ノ卅一其の他及へブライ八ノ十

(六) 「律法の義は、肉に従はで靈に従ひて行ふ我儕に成就せん爲なり」とは如何なる意味なりや、羅八ノ四

(七) 現世に於ては、人が全靈、全身、全生、全力を以て神を愛するに至る事は不可能であるか、又基督者は此愛によつて全うされぬ所の律法の下にある者なる

現世に於て完全に達し得る事を否定する人々に對して謙遜に提供する質疑 一一三

か。

(八) 魂が肉體を離るゝと云ふことが、魂を其の内住の罪より潔むるか。

(九) 若し潔むとするならば、凡ての罪から我儕を潔むるキリストの血以外のものならずや。

(十) 若も主の血が凡ての罪から、肉と魂と結ばれてある間に、我儕を潔むるものなれば、夫れは此現世に於てはあまゝいかにあるまいか。

(十一) 若しも夫れが肉と魂との合體が離れる時であるとするならば、其恵は次の世の事ではないか。そして夫れは遅過ぎはしないか。

(十二) 若しも死際に於てあるならば、魂が如何なる状態にある時であるか、肉體の内にあるでもなく、又其外にあるでもない時ではないか。

(十三) 何處に、キリストが決して我儕に與へる事を企て給はない事の爲に祈れと教へ給ひしか。

(十四) 「聖意の天になる如く地にもなさせ給へ」と祈る事を主は教へ給はざりしか、そして夫れが天に於ては完成して居るではないか。

(十五) 若しもさうであるとすれば、地上に於て完全の爲に祈る事を、我儕に主は教へ給はざりしか、又主は夫れを與へる事を企て給はなかつたであらうか。

(十六) 聖パウロは神の聖意に従つて、祈つたのではあるまいか。即ち彼がテサロニケ人が、全靈全生全身に於てに於て、キリストが來り給ふ迄咎なく、潔められ、支へられる様にと祈つた事は此世に於てはあつて、次の世に於てはあまゝい、若し然らざれば彼は死者の爲に祈つた事になるではないか。

(十七) 卿等は誠心誠意、現世に於て内住の罪から自由にせらるゝ事を望みなされぬか。

(十八) 若しも望むならば、夫れは神が卿等に其望みを與へ給うたのではあるまいか。

いか。

(十九) 若しもさうでないならば、(決して全うされない所のもの、不可能なものであるならば) 神の與へ給ひし望は詐となるではないか。

(廿) 若しも卿等が、唯だ夫れを望む丈けの誠意すらも有たぬならば、卿等に對しては餘りに高過ぎる事に就て、争ひつゝあるのではあるまいか。

(廿一) 卿等は、嘗て、神が卿等の心の想ひを潔め、全き愛を神に捧げ得る様に爲し給へと祈しや。

(廿二) 若しも卿等が願ふ所の者を望むでもなく、又與へらるゝとも信ぜぬならば、夫は彼の愚なる者の祈の如くではあるまいか。

神がこれ等の質問を靜かに、又公平に考へる様、卿等を助け給はん事を祈る。

某實證者物語

二四、其歳の終の方に神は燃え輝ける光であるゼインクローバーを天に招き給うた。彼女は基督者の完全に就ては之を活き又之に依て死したる實證者であつた。故に此處に彼女の臨終に於ける状態と又其魂に非常なる變化を起し給ひし神の御働きに就て彼女自身の平明にして最も飾り無き實驗を載せたる書翰を紹介する事は本題に對して決して奇異な事でないと思ふ。

一七六一年五月二日、私に記憶力のあらん限り、此の感謝が永續すると信じます。卿がガラテヤ五章五節に就て説教なされし以來私は自分の魂の眞の状態に就て明白に悟りました。其御説教がよく私の心の状態を畫かれたものであつて、又我眞の要求、即ち眞實の幸福を教へられました。M氏の書翰を紹介せられました。夫も妾が希望せし所の宗教を叙述したものでありました。其以來進んで取るべき獲物が確實に目の前に置かれた様であつて且つ勵んで其目標に進むの力を得ました。又祈を以て自分を警戒する者となりました。或時は多くの困難の内

に、或時は恵を期待しつゝ、忍耐を致しました。卿がロンドンをお去りになる前の數日私の魂は祈の中に與へられたる聖句を自身に當嵌めて約束として握つて居りました。夫は、「汝が求むる所の主は忽ち其宮殿に來り給ふべし」との言でありました。主は斯の如く來り彼の精鍊者の火の如く臨み給ふ事を信じました。御出發になりました。此の夜主が聖言を成就し給ふに非ずば眠り能はずと迄になりました。私は考へましたが、此時位「静まりて我の神たるを知れ」との言の力を悟らされた事はありませんでした。其時私は主の前に無きが如きものとなりました。又自身の魂の中に完全なる平和を喜ぶ者となりました、最も主が私の罪を亡ぼし給うたか否かを未だ知る事が出来ませんでした。自分は主を讃め上る事の出来る爲にそれを知りたいと望みました。然るに不幸にして間もなく不信の念が還り來りて又重荷を感じて唸りました。水曜日倫敦に參りまして、間斷なく主を求めて祈りました。其時約束して申上げました。若し主が私を罪より救つて下さるなら

ば聖名を讃め上りますと、又キリストを得上る爲には凡てのものを捨てる事が出来ますと申し上げました。然るに、凡て是等の條件は價値のなき者であると解りました。それは主が私を救ひ給ふには唯聖名の故に爲さるゝのであつて自由のものであると解りました。木曜日に非常に試みられました。それは自殺をしようか、或は最早や決して神の人々と語るまいかとまで試みられました。然れど尙神の赦の愛に就ては疑ひませんでした。去りながら

『我儕神を愛し上つるに神のみを愛せぬ事は死よりも惡き事である』と悟らせられました

金曜日になりました。私の苦痛が深くなつて來ました。祈らうと努めても出来ませんでした。D夫人を訪ねまして祈つて貰ひましたが、D夫人は其苦痛は私の生れながらの性が死につゝあるのであると語られました。聖書を開きまして、「臆する者信ぜざる者は火と硫黄の燃ゆる池に於て彼等の報を與へ願たるべし」との言を

読みまして自分は堪へ難く感じました。(黙示録二一ノ八)、然ど、馬可傳十六ノ六と七とを讀んで「駭き異む勿れ爾曹はナザレのイエスを尋ね、行きて弟子に告げよ彼は爾曹に先だちてガリラヤに行けり爾曹彼處にて彼を見るべし」と讀んだ時に、私は力づけられました。そして自分は基督を我宅で見上る事が出来ると思ひて祈り得る様になりました。其夜歸宅致しましてG夫人に會ひました。彼女は私の爲に祈つて下さいました、豫定論者にとつては「主よ爾は人を顧慮し給はざるなり」とより祈る外はありませんが、主は私を恵み給ふ事によつて、其様な方でない事を證明されました。瞬間の内にイエス・キリストを握り唯單純なる信仰によつて救を發見する事が出来ました。主は我中に在りまして主であり王である事を確め給ひました。自分は又此後最早惡を見ざるべしと確められました。「我智慧、また義また聖き又贖となり」(コリント前書一〇三十)給へる主を讚めました。私はイエスは凡てに於て愛すべき方である。又其凡ての御職務に於て我主であると悟りました。

榮光彼れにあれ。彼は今競争者なしに我が心を支配し給ひます。故に主の御旨の外何物も知らず、誇もなく、主に献ぐる愛の外他に無きこと、之れが信仰によつて立てる私の立場であると知りました。又祈りつゝ守ることが信仰の護衛であらねばならぬと知りました。今神に於て幸福でありますが、次の瞬間もさうであると信じます。私は又あなたが教へ下さいました哥前十三章を取出して我が心と生活とを比較致します、斯くして自分の缺點を感じ、贖の血の必要を覺えました。最とも假令自分は自分があるべき筈のものになつては居りませぬけれども其處に叙述されて居ります愛を或程度に感ぜぬとは云へません。希望する所は測り知るべからざるキリストの愛の中に没入したいことであります。「義人は信仰によりて生くべし」と云はれてありますが、凡ての聖徒の最微なるものよりも小さくある所の私に此の恵が與へられてあることを悟ります。假令私が天の使の長であるとも主の前には顔を隠して沈黙して主の榮光をあらはし上るのみであります。

う。

左の報告は以上彼女が語りし事を見聞せし某氏の證言である。

(一) 十一月の始め彼女は其生涯に起り來りつゝある所の事柄を豫想した様であつた。そして屢々左の歌の句を唱へて居た。

『痛みが此弱き肉の體を蔽ふ時』

小羔の忍耐もて、我胸をよろひ給へ。』

彼女の女が使を以て其病氣を報ぜし時に書き付けてあつた言は、「自分はイエスの御旨に従ふ、彼の送り給ふ凡てのものは愛によつていみじくせらてあり、又自分は左の歌をさく思ひ、幸である。

我兄弟ら我を待ち、

聖使ら我を招き、

主は來れと命じ給ふ。』

(二) 自分が彼女に語りて御身の爲には死を擇ぶべきか生を擇ぶべきか我は能はずと云ひし時、彼女は、「若しも聖意であるならば、私が先に死にます様にと私は祈りました。又主が私にのたまふ所に據れば、郷が生き残りて私の眼を閉ぢて下さるであらうと存ます」いつたと。彼女が天然痘であると云ふ事が解つた時に私は彼女に語つた。我愛する者よ、若し御身の病氣が如何なる病氣であるかを語つても怖れられないだらうか。夫れに對して彼女の答は、私は主の聖意に對しては決して怖れる事は出來ませんと云ふ事であつた。

(三) 病氣は間もなく重くなつて來た、それと同時に彼女の信仰も強くなつて來た。十一月十六日火曜日に彼女は私に語つた「私は榮光ある状態にて聖坐の前に禮拜してをりました。而して私の魂はすつかり神様に引き入れられてをりました。何か主が特別な約束を與へられたかとの尋ねにし對して、彼女は「否、凡ての状態が左の歌の如き感で充たされてをります」と答へた。

「身動きもされぬ聖なる威厳、静にして愛に充されたる天」

(四) 木曜日に「何か私に語りた事がありますか」と尋ねた時彼女の答に、「否既に郷の御承知の通りの神は愛であると云ふの外何物もありません。」又何か特別に約束はありませんか」との尋に對して彼女は、「私は別に要るやうには思ひませんが私はなくとも生きる事が出来ます。私は癱疾の固りで死ぬでせう。然しながら未來は榮光の充てる内に、郷にお目にかかります夫れ迄にも私は靈に於て郷と交りましよう。」

(五) M君が、最も優れた道は何か、又其れに對する主なる障害は何であるかと尋ねし時、彼女の答に「最も大なる障害は普通生れながらの性格より起るものであるが。私のは引込み勝な事、静か過ぎる事、多く耐へ過ぎる事、又言少なき事でありました。或人は此の道が彼の道よりも優れてゐると考へる。然し乍ら要は神の聖旨に生きる事に歸する。過去數ヶ月私が特に此事の爲に身を獻げて居つた時に主の靈の導を感じた。そして聖なる者より受けた所の膏が凡ての事を私に教へ給ふ故に此外人の教を要せぬと考へました。」

(六) 金曜日の朝彼女は「私は死に近いと信じます」と語つた。而して病床の上にて坐つて云ふに、「主よ我は爾を崇む。爾は我と共に常にあり給ふ、そして爾主の有り給ふ凡ては我が有なり。主の愛は我が弱きよりも強く、我れ助けなきよりも大きく、我が價値なきよりも大いなり。主よ爾は此の壞れたるものに語り給ふ汝は我が姉妹なり。榮光爾にあれ。おゝイエスよ爾は我が兄弟に在し給ふ。凡ての聖徒と共に爾の愛の長さ廣さ深さ高さを知らしめ給へ。然して是れ等の人々を祝し給へ(數人其所に居りたり) 彼等をして爾が望み給ふ如く凡てに於て鍛練せしめ給へ。」

(七) 數時間後に死の苦が彼女に襲ひ來りたる如く見えた。然しながら彼女の顔は勝利の微笑を以て充され、喜悅の爲に手を拍つて居つた。夫人が云はるゝに、

「貴女は小羔の血によりて勝利を得て餘がなくなりなる」之れに對して彼女は答へて、「然り然り愛するイエスよ、おゝ死よ、汝の刺は何所に在りや」と。其の後彼女は暫らくの間眠るが如く横はつて居つた。暫くして後彼の女は話さうと努めたが出来なかつた。兎も角も彼の女は其の室にある凡ての人と握手をして自分の愛を表した。

(八) その時にW氏が來られた。彼女が云ふに「汝にお目に懸る迄生きて居ると思ひませんでした。然し主が此機會と卿にお話する力とを與へて下さつた事を感謝します。私は卿を敬愛します。卿は常に私に最も嚴格なる信條を教へられ、私は夫れに従ふことを喜びました。人が喜ばうと喜ぶまいと今後もさうし續けて頂きたうございます。」其の時氏の尋に「今貴女は罪より救はれてをると信ぜらるゝか」と彼の女の返答に「はい其れに就てこの幾月の間疑うた事はございません。前に疑の有つたのは私が信仰に居なかつた爲でございました。私は今信仰を有ち續けて來たと思ひます。而して完全な愛が凡ての怖を除きました。卿に就いては私はそれを見るまで生きてはをりませんけれど卿の今後のお働きは以前のものより優れたものであると主が私に約束し給ひました、此の六ヶ月間は多くの人々が評する如くに私は非常な熱心家でありました。然しながら此の間位キリストの心に近く住んだ事は前にありません。何うぞ卿の魂の愛せらるゝ單純に従ふ事に依つて幾百の多くの魂が慰めらるゝやうにおつくしなされませ。」

(九) 彼女の祈によりて神の愛を享くるに至りし人に對して彼女は語る、「自分は巧に仕組れた作り話に乗つて來たとは思はない。自分はこの上なく幸福です。卿等は何所までも勵んで標的に達する迄決して止まつてはなりません。」M嬢に對して語るに、「キリストをお愛しなさい。主はあなたを愛し給ひます。私は神の右で御身に面會致します、然し乍ら此の星と彼の星と、その榮光各異なる様

に、復活に於てもさうでせう。今神のみ前に於て要求したいと思ふ事は、其の日に榮光に充たされて私にあつて頂きたい事です。世に倣ふ事を凡て避けなければなりません。然らざれば多くの特權を失なふに至ります。自分は答なくして御前に立つと確信して居ます。平和に汚濁なくして主の前に立ち得る様力めて下さ

507

(十) 土曜日の朝次の様な意味で彼女は祈つた。わが主よ私の生命はただ主の聖旨を爲さん爲にのみ延ばされてゐることを信じます。假令もはや飲食することが決してございせんでも、聖旨を爲し給へ。(此時殆んど二十八時間彼女は何物をも攝取せざりしなり)このまゝに十二ヶ月をも喜んで過しませう。人はパンのみにて生きるものに非ざるを承知して居ります。不平といふ事は吾儕の中には影だにないことのため聖名を崇め奉る。此の意味に於て私共は病氣が何を意味するかをも存じませぬが、實に、主よ或は死あるひは生今あるもの又後あらんもの又

如何なる被造物も、一瞬間でも爾の愛より吾儕を離らす事は出来ませぬ。斯くせられたるものを祝し給へ。彼等の魂の中に少しの缺あらぬ様に、然り缺なくせらるゝであらうと信じます、信仰に由て祈ります」と。

日曜日と月曜日に彼女は無意識の状態の様であつた。然し時には醒めて居る様であつた。其中にも明白に解つて居た事は、彼女の心は靜かに天にあつた事であつた。或人が彼女に對して「イエスは吾れ等の標的である」と云ひしに對して、彼女の女の答へしは「自分は只一つの標的を持つ、自分は總てに於て靈的である」と。M夫人が彼女に語つて「君は神の衷にお出でになると云ひしに對して、彼女は「全く」と答へた。或人が彼女に尋ねて「汝は私を愛しますか」と云ひしに對して「あゝ私はキリストを愛する、私は私のキリストを愛する」と答へた。他の人に云ひしは「自分は永く此所に居らぬであらう。イエスは貴くある、誠に甚だ貴くある。」彼女がM嬢に語りしは「主は甚だ良くあらせらるゝ、主は凡てにまさ

つて私の魂を支へて下さる」と。彼女が死する前十五時間の間強き痙攣に襲はれた。其の苦みは非常であつた。或人が「汝は此苦みを通して完全にせらる」と語りしに對して、「左様益々」と語つた。暫く靜かに横はつた後に彼女が云ふに「主よ爾は強くあり給ふ。」暫く經つて後に彼女は其最後の言葉を語つた。「イエスは私の凡てである。榮光永遠無窮に彼にあれ」と。其後約半時間靜かに横はつて居たが溜息もなく又唸りもなく絶息した。

二五、翌年、罪から赦されてをると信する所の人々は次第に増して來たので主として彼等の爲に出版をする必要ありと定めて發表した者を左に採録する。

更に進んで基督者の完全を説く

(一) 凡て信する者の義とせられん爲にキリストは法律の終となり給へる意義。

(羅十の四)

これを了解する爲には此處に語られてある所の律法が何を意味するかを知らなければならぬ。自分の了解する所に依れば、第一、モーセの律法、即ちモーセを通じて啓示されたるもの、全體であつて、これをパウロは一體として語つて居る。これ共、三つの部分即ち政治道德及儀式に關する律法と分けねばならぬ、第二、アダムの律法、それはアダムが無罪の時に與へられたるものであつて普通行爲の律法と呼ばれてゐる。これは實質に於て天の使の律法即ち天使と人とに通用して用ひられたる所のものである。此等の律法の要點は、人は其の造られたる時より與へられたる凡ての力を神の榮光の爲に用ひねばならぬと云ふ事である。抑も人は理解力に於ても又愛情に於ても缺なきものとして作られた。其時彼の肉體は心の働に對して妨害とはならなかつた。即ち肉體は心が凡ての事を明白に理解するに、又眞理を定むるに、或は道理を論ずる場合に正しく理路を辿るに、少しの

更に進んで基督者完全を説く

妨ともならなかつた。道理を論ずる場合と云つたが、恐らくは其必要は無かつただらう、多分理窟の必要は彼の朽ち易き肉體が心を壓迫して其自然の能力を減損するに至りし迄必要がなかつたであらう。恐らくは其時迄心は凡ての眞理を、恰も今日眼が光に接する時の如く、明白に又直接に悟る事が出来たと思ふ。従て、此規法は人が固有の能力に比例して、常に總ての點に於て正しく考へる様、常に語る様、又常に動作する様要求したのである。當時人は斯の如くする事が出来た。神も亦彼が爲し得る奉仕を要求し給うたのである。

然し乍らアダムは墮落した。彼の朽ちざる肉體は朽つるものとなつた。爾來肉は魂に對する妨者となつた。そして其動作を遮るものとなつた。故に現在に於ては人の子は誰でも凡ての時明白に了解し又は眞實に事を判別すると云ふ事が出来ぬ者となつた。凡そ判定と理解力とに於て缺けて居る所には正しく論理を辿る事は不可能である。其故に人にとつて今は過をなす事は呼吸する如くに自然となつ

た。呼吸なしに生存し能はぬ如く誤謬なき生涯は無くなつた。従て人は誰もアダムの律法が要求する所の奉仕を捧げ得ざるものとなつた。

今は誰も此律法を無理に全うしなければならぬといふことはない。神は誰にも之を要求し給はぬ。蓋しキリストはモーセの律法に於ける如くアダムの律法の終となり給うたのである。死によつて主は兩方の律法を取消された。そして何れにも人は従ふ必要がなくなつたのである。故に今生きて居る者には誰でもモーセの律法と同様アダムの律法を強ひて遵守しなければならないといふことはない。

(現在及未來の救の爲に是等の律法の遵守が條件とならぬといふ意味である)。
此代りに、キリストは別の律法を建て給うた。それは信仰の律法である。行ふものではなく信ずるものは誰でも神より義を賜はると云ふ律法である。是は充分なる意義に於て義とせられ聖とせられ又榮光を興へらるゝのである。

(二) 然らば我儕は律法に對して死にたる者であるか。

更に進んで基督者完全を説く

吾儕は我儕の爲に與へられたるキリストの肉體に由りて律法に對しては死んだものである（羅七ノ四）モーゼ律及アダム律に對して主の死に由りて我儕は全く自由にせられた即律法は彼と俱に終つたのである。

（三）「我らは神に向ひて律法なきに非ず、即ちキリストの律法の下にあるなり」とは如何なる意味であるか（哥前九ノ二十一）

我々は所謂前記の律法なき者である。されど全く律法なき者となつたのでは無い。神は信仰の律法といふ外の律法を建て、神とキリストとに對する我儕の律法と爲給うた。我儕の造主及贖主共に、其を遵守する事を我儕に要求し給ふ。

愛は律法を全うするものである

（四）愛は此律法を全うするものであるか。
疑もなくさうである今我儕が頂て居る凡の律法は愛に由つて全うされる（羅十

三の九、十）愛に由つて動き又働く所の信仰こそ神が今の人に要求し給ふ凡てである、神が天使的完全の代りに愛に依れる完全を代りと爲し給うた。

（五）愛が凡ての命令の目的となるとは如何なる意味か（テモテ前一の五）
それが神の凡ての命令の目的である。愛は基督教會の全體及各部に於て目指されたる標的である。其の根據は心を潔むる信仰であるが、目的は善き良心を保つ愛にある。

（六）それは如何なる愛であるか。
夫れは我全身全靈全生全力を盡して主たる我神を愛し又我儕自身の如く隣人を愛するといふ愛である。

（七）此愛の結果或は特質は如何なるものなりや。
パウロが愛をひろく我儕に語つて居るが愛は忍ぶ事である。愛は神の子達の凡ての弱點世の子供等の凡ての不徳を忍ぶ、それも只僅かの時でなく神が望み給ふ

愛は律法を全うするものである

だけ長く。愛は凡ての事に於て神の導を見、さうして喜んで夫れに従ふ。同時に愛は親切である。凡てに於て終迄忍び柔和に温從に仁慈である。

「愛は嫉まらず、」各種類各程度の嫉を心から取除くのである。愛は輕卒なる事粗暴なる事或は剛腹なる事なく、又輕々しく或は苛酷な判定を下さぬ。愛は不法な行を爲さず非禮を爲さず、凡て愛の人として不相應の事を爲さぬ。己の安逸快樂名譽或は利を求めぬ。愛は「輕々しく怒らぬ。心から凡ての怒を排除する。人の惡を念はぬ、凡ての嫉妬猜疑、惡を信じ易き心等を除く。愛は惡を喜ばず、罪を歎き最も惡むべき敵の罪或は痴愚を慨歎す。愛は眞理を喜ぶ。人の子凡ての聖なる事、幸福なる事を喜ぶ。凡ての事を抱擁する。人の惡を語らず。他人の性格の進歩の爲に致す所の凡ての事を「信ず。」愛は凡ての事を「望む。」即ち認めねばならぬ過でも酌量輕減し得るものを望む。愛は神が許し給ひ、或は人や惡魔が蒙らすすべてを忍ぶ。之がキリストの律法、完全の律法、自由の律法である。

信仰（或は愛）の律法と働の律法との間の此差別は小さな事でもなく又不要なる事では無い。普通理解力を有する人には誰にでも夫れが明白で容易く了解し得らるゝ事である。之れが多く疑と怖とを防ぐ爲に、愛に歩んで居る人の爲に絶對に必要である。

(八) 然し乍ら吾等は多くの事に於て罪を犯すではないか、我儕の中最善と云はるゝ人も此律法を犯すではないか。

或意味に於て凡て吾儕の氣質思想言語動作等が愛から出づる間は罪を犯さぬ。然し乍ら他の意味に於て吾々が肉體に止まつて居る間は多少とも犯すであらう。愛も、又上より膏注がるゝ事も、吾等を全く過なきものとはなさぬ。故に吾等の理解力の止むを得ざる缺點の爲に多くの事に過を致す、これらの過が屢々我儕の性質に言葉に動作にあるよくない事を生ずる。人の性質を見誤る爲に其人が受くべきほどの愛を與へない事がある。従て先方に對して愛の律法に反したる仕方

愛は律法を全うするものである

を爲し、又語り、又行ふ事は據ない。

贖の必要

(九) 以上の如き過の爲にも我儕はキリストの贖を要しない。

最も聖なる人であつても、尙ほ預言者として世の光としてキリストを要する。主は各瞬間光を與へ給ふのみ、主が、離れ給ふ刹那凡ては暗である。人は尙ほキリストを王として要する。神は潔きの蓄積を與へ給はぬ。即ち人が聖き力の供給を毎瞬間受くるに非れば、聖ならざるもののほかに残るものはあるまい。人は其聖なる事柄の爲に贖を爲す所の祭司として、キリストを要する。假令完全なる聖も只イエス・キリストを通じてのみ神に受入れられ得る者となる。

(十) 然らば最善なる人も殉教者の死に際して語りし如く我自身としては只罪、暗黒、地獄のみである。然し乍ら主は我光我聖、又我天であると云ひし言を

取るべきか。

全くさうでもない。然し乍ら最善なる人は云ふ。主よ爾は我光、我聖き、我天である。爾と一致しまつる事によりて我は光と聖きと幸福とに充たさる。然れど若し我のみ残さるゝ時には我は只罪、暗黒、地獄に外ならずと。

然れど話を進めて云へば、人の最善なるものすら、彼等の祭司、彼等の贖父なる神の前に立てる仲保者としてキリストを要する。それは彼等の恵みの繼續がキリストの死と仲保とによるのみならず、又彼等が愛の法に達してゐないからである。凡て生きて居る所のはさうである。卿等凡て愛を感じる所の人々も前記の愛の説明に比較し、此の量に照らして見る時に、多くの點に於て缺けて居る事を發見するであらう。

(十一) 若し之れが基督者の完全と一致するならば其完全は凡ての罪から逃れて居るものではない。即ち「罪とは律法を犯す事」である。而して完全なる者も

彼等が頂いて居る處の律法を犯す。更に彼等はキリストの贖を要する。主は只罪のみの贖者である。然らば罪なき完全といふ事は矛盾しては居るまいか。之は議論をする價値はない。然し乍ら完全した者が如何なる意味に於てキリストの贖を要するかを調べねばならぬ。彼等は新に神と和ぐ爲にキリストを要せぬ。彼等は既に和を得たるものである。又彼等は神の愛を回復する爲にキリストを要せぬ。されど夫れを續ける爲に要する。キリストは新に父の赦を彼等に獲させ給ふのではないが彼等の爲に仲保者として常に生きて居らるゝ。ヘブライ十ノ十四に彼は一つの供物にて潔めらるゝ者を永遠全うすればなりとあるが如くである。此點を適當に考へない爲に或人はキリストの贖を要する事を拒む。誠に斯る人は極僅かで自分の記憶の中にも英國中で五人もないと思ふ。二説の中一つを棄てなければならぬとならば自分は「完全説」をすてる。然し乍ら何れも捨てる必要はない。自分が主張する所の完全とは、常に悦び絶えず祈り凡ての事感謝する所の愛である。これはキリストの贖の必要と矛盾しない。誰にしても之と異なる所を主張するならばそれはその人の責任である。

(十二) 然らば完全は至誠以上何物を意味するか。若し至誠が愛を以て充たされたる所の心にして、自負、怒、慾望、自己心を除きたる心、常に悦び、絶えず祈り、凡ての事感謝すると云ふ意味であるならば完全と同意義である。然し乍ら此意味に於て用ひられたる至誠は少い、故に自分は依然古い言の方が良いと思ふ。

人は彼の天性の性情即ち自慢、怒、汚欲、自己心を有して居ても至誠であり得やう。勿論之等の欲及外の汚から潔めらるる迄は完全とは云へぬ。更に此點を明にすれば、余は全心を以て神を愛する多くの人を知つて居る。主は彼等の唯一の望であり又唯一の喜びであり、而して彼等は主に於て常に幸福である。又彼等は其隣人を自身の如く愛する。彼等は他人自身の幸福を望む如く、

至誠に熱心に間斷なく善人にも悪人にも友人にも又敵にも幸福を望む。彼等は恒に喜び絶えず祈り凡ての事感謝する。其の魂は潔き喜と祈と讚美を以て神に攀ぢ登りつゝある。之れは事實である。又明白にして、確實なる聖書的の實驗である。然れど、斯る魂ですら心と不調和なる肉體に宿り居る爲恒に壓迫を受け、考へる事、語る事に於て、行動する事に於て正しく其望む通りに働く事能はぬのである。より善き肉體の機關の缺乏の爲魂は一時過つて考へ語り又働かねばならぬ。愛の缺陷の爲に非ずして、智識の缺陷の爲である。斯の如きが事實である故に、其缺陷とそして其結果があるに拘らず、彼等は愛の律法を全うするのである。但斯の如き場合決して完全律に對して全く一致して居るとは云ひ難いのである。夫れ故最も完全なるものも尙ほ贖の血を要する次第である。而して他人の爲にも自身の爲にも「主よ我等の罪を赦し給へ」と云はねばならぬのである。

(十三) 若しキリストが其律法を消し給うたならば夫れに違犯せる場合如何にして贖の要ありや。

如何なる意味に於て彼がそれを消し給うたかを考へよ、然らば困難は取去らるべし。

主の死の永存的の効果と又其永続的の仲保あるに非ざれば律法は尙ほ吾等を罪するものである故に我々は尙ほ其律法に違犯する凡ての行の爲に贖を要する。

完全は誘惑を除外せぬ

(十四) 罪から救はれたる所の人でも誘惑にかゝるか。
然り基督も亦誘惑にかゝり給うた如く。

(十五) とは云へ卿が誘惑と稱せられる所のものを自分は我心の墮落と稱へる。此兩者を如何に區別せらるゝか。

或る場合に於ては聖靈の直接の證明なしには區別する事が不可能である。然し

乍ら一般に下の如く區別し得ると思ふ。

或人が私を讃める、此所に誇の誘惑がある。然し即刻自分の魂は神の前に謙遜になる、而して少しの誇をも感じない。誇と謙遜とは異ふものであることを余が知つてゐると同様、余は之をたしかに知つてゐる。

或人が自分を打つとする、此處に怒の誘惑がある。其時我心は愛を以て溢れ、全く怒を感じぬならば愛と怒といふものは同様でないといふ事が我心に確實である如く怒つて居ないと云ふ事が明白である。

或婦人が自分を誘惑するとする、此處に汚慾の誘惑がある。然し瞬時に自分は縮み引込むならば、そして全く汚れたる欲の望を有たぬならば、此事に就ては自分の手が冷くあるか或は熱くあるかに就て明白であるが如くに心に區別がある。

斯様に眼の前にある事實によつて誘惑せらるゝ事も眼の前になくして誘惑せらるゝ事も同様である、即悪魔は人から讃められる事、害せらるゝ事、或は婦人の

ことを我心に思ひ出さず、其瞬間魂が此等の誘惑を拒絶して純粹なる愛を以て充されたる状態に止まる。嘗て誘惑に遭ひ墮落せし過去の事實に對して今の潔き状態を比較する時に區別は一層明かである。

如何にして我々は潔められてをる事を知り得るか

(十六)如何にして卿が聖められてをり又生れながらの墮落から救はれてをる事を知り得るか。

それは自分が義とせられてをる事を知ると別段に變つた事は無い。成義も潔めも「これによりて我等は神のもの」である事を知り、「吾等に與へられたる所の靈に」由つて知るのである。

我々は證に由つてそれを知り又聖靈の結ぶ果によつて知るのであるが、初めは證に由つてゐる。丁度義とせられたる時の我等の靈と聖靈とが共に罪が赦され

如何にして我々は潔められてをる事を知り得るか

たる事を其如く證せし如く、聖靈は我等が潔められてをる時には其罪が除かれてをる事の證を爲し給うた。實に潔められたる事の證は初めは常に明白でない事もある(義とせらるゝ時の證も亦さうであるが)。證を受けたる後も亦常に同様に明白であるとは云へぬ。成義に對しての證の如く或時は強く或時は弱い。又或時はそれが撤回されてゐる事もある。とは云へ全體に於て聖靈の證は兩者共に明白にして確實である。

(十七) 完聖なる者がたゞ成義の如き比較的の者に非ずして根本的の者であるならば別に聖靈の證明の必要はあるまい。

然し新生は只だ比較的のものであらうか。根本的の變化ではあるまいか。それ故に若しも完聖が根本的の變化である故に靈の證を要せぬならば、同じ道理によりて神の子と生れたる事又神の子である事に就ての證明も要せぬ譯である。

(十八) 完聖は夫れ自身で證明するではないか。

新生も亦さうではないか。或時は證明し或時はしない。完聖も其通りである。誘惑の時に於てサタンは神の働を蔽うて非常に弱いか若くは強い智力の何れかを有てる者に對して種々なる疑、理窟を注ぎ込む。斯様な時に於て證者は絶對的の必要である。之れなくしては完聖の働は唯だ明かにされざるのみならず最早存在し得ざるに至る事がある。之無くしては魂は神の愛に宿り能はず。勿論常に悦ぶ事も出来ぬ。そして凡ての事感謝する事も出来ぬ。故に我々が潔められてをると云ふ直接なる證者は最高の程度に於て必要がある。

或人は云ふ自分は罪から救はれてゐると云ふ證を有たぬ、然し乍ら決してそれに就て疑はないと、よろしい、其處に疑が無いならばそれで充分である。若しも疑が起さるならば、證を必要とするであらう。

完聖に對する聖靈の證に就ての聖書的證據

(十九)如何なる聖句が斯の如き事に就て示し或は完聖を期待すべき理由を供するか。

「我儕の受けしは此世の靈に非ず神より出づる靈なり是れ神の我儕に賜ひし所のものを知るべき爲なり」(哥前二ノ一二)

扱て確かに完聖は神より我儕に自由に與へらるゝ所のものである故に何故我々が夫れを期待し能ふかの理由が書いてない。使徒の云ふ「我儕聖靈を受くるは斯く自由に我等に與へられたる所のものを知らんが爲」である。彼の有名なる聖句「神の靈我儕の靈と共に我等が神の子たる事を證す」(羅八ノ十六)も亦前の句と同じ様な意味を含んで居る、或人は此證明は最も低き意味に於て神の子である人にもみ與へらるゝものではないかといふ。否、最も高き意味に於て神の子である

人にも勿論聖靈の證明がある。之れに對する疑の餘地はない。

此證明は唯だ基督者としての最高位に存る人にもみ與へられたるものであると多くの人は信じて居るが如何。使徒は少も區別をして居ぬ。故に神の子たるもの凡てに屬すべきものであると卿は答へまいか。最も低い者にのみ與へられたるものであると人は信じてゐるといふならば前と同じ返事で足やう。

同じく壹約五ノ十九によるに、我儕は神より生れたるものである。然らば如何にして我儕は之れを知るか。夫れは主が我儕に賜ひし聖靈に由つてであるか。聖靈に由つて知る事は主は我儕の中に宿り給ふと云ふ事である。斯の如き聖句から聖靈の證を取り除く事は「結ぶ所の聖靈の果のある事を打消すと同じく聖書に於ても又普通の道理に於ても根據のない事である。我々が神の子である事を此等の聖句に由つて知ると同時に、我儕は赤兒であるか青年であるか又父老であるかも知れるのである。

勿論凡ての青年又父老でさへも不斷此證明を心に持つて居るとは云へぬ。神より生れたるものであるとの直接なる證明は間歇的に來るかも知れぬ。但キリストの内に成長すると共に此間隔が少くなつて彼等の成義完聖及に就ても不斷の證明を衷に有するに至る、謙遜に神に近く従ひ歩むならば今よりも多くの人々が其證明を得るであらう。

(二十) 或人々は神から決して墮落しないと云證明を聖靈から受る事ができまいか。夫れは出來やう。死も生も我等を神から離す事は出來ぬと云ふ信念は害が無いのみならず或場合に於ては最も有益である。故に決してさういふ人々を悲しませず寧ろ終まで堅く保つ様熱心に鼓舞すべきである。

(二十一) 或人は決して罪を犯さぬと云ふ事を聖靈に由つて證明せらるゝか。勿論神が特別な人に如何なる保證を與へ給ふかは知ぬ。然し一般に於て人は罪に陥らぬと云ふ事は聖書に記してないと思ふ。若しも其處に左様な場合がある

とすれば、夫れは潔められてキリストの中に父老と稱せられ常に喜び絶えず祈り凡ての事感謝する状態に在る人であらう。然し斯の如き人でも退歩しないと云へぬ。潔められたる人でも墮落し又亡びる事が出来る(希十ノ廿九)キリストに於ける父老達も「此世を愛する勿れ」との警戒を要する(壹約二ノ十五)常に悦び祈り絶えず感謝して居る所のものも聖靈を熄すことが出来る。(撒前五ノ十六等)救ひの日の爲に印を受けし者さへも尙ほ神の聖靈をして憂ひしむる事があるかも知れぬ(弗四ノ三〇)

故に假令神が或特別な人に其様な證明を與へ給ふ事があるとするも一般の基督者にとつては左様な期待を爲す根據とする聖句の無き事を知らねばならぬ。

完聖に於ける聖靈の結ぶ果

(廿二) 如何なる聖靈の果に依つて吾々は最も高き程度に於て神のものであるとい

完聖に於ける聖靈の結ぶ果

ふ事を知り得るか。

常に宿つて居る所の愛と喜と平和とに依つて。常に變らざる辛抱忍耐断念に由つて。凡ての挑撥的態度に對して勝つ所の寛容に依つて。親切温順快活精神の柔和なる事に依つて。忠信單純神の如き至誠に依つて。謙遜沈着心の平靜なるに依つて。節制即ち管寢食のみならず又自然的及精神的の凡ての事柄に於ける節制に依つて知らるゝ。

(廿三) 以上は義とせられてをる人の有すべき徳目であつて、夫以上別に優れて居るとも思へぬが如何。

さなりや、神の意志に對して少しも私心の混せざる假令全的服従？挑撥せられる時にも怒の分子なくして保つ所の寛容の精神？何等の誇をも有せずして只神の内にも又神の爲に愛する愛のほか、凡ての被造物を少しも愛することなき、神に對する愛？人に對し凡ての嫉み凡ての妬、又速断より離れたる愛？精神を破らるゝことなき平靜に保ち得る柔和？及凡ての事に於ける節制？之等の點に達して居る者は未だないと云ははゞ云はれよ、然し凡て義とせられたる者は斯の如くあるとは云はるゝな。

義とせられたるものも忿り誇り及私心を感じる

(廿四) 新らしく義とせられたるものも以上の徳目を有するものがある。それ等の人に對しては如何に説明すべきか。

若しも眞に其様な人があるならば彼等は潔められたる人、其義とせられたる瞬間に於て罪から全く救はれたる人で斯の如き人は神の與へ給ひし賜を決して失つたり、又罪をもはや感じることはなからうと云へやう。

然し乍ら斯の如きは除外例である。普通義とせられたる人の状態は反對である。彼らは多少とも誇、怒、我儘或は心の墮落に傾くを感じる。此等のものが次第に

義とせられたるものも忿り誇り及私心を感じる

取り去らるゝまでは彼等は愛に於て全く改造されてをるとは云へぬ。

(廿五)然し義とせられたる人の、それが一般の状態ではあるまいか。彼等が漸次に罪に對しては死に、恵に於て成長して遂に死の時か或は其少し前かに神が彼等を愛に於て全ふさるゝのではあるまいか。

これが多くの場合の状態であると信ずる、然し凡てには非ざるべし。神は人が光を受け恵に成長し主の心を奉じ従ふに至る迄即ち彼等が義とせらるゝか又聖めらるゝ迄相當の時を人に與へ給ふ。乍併神は何時でも此規則に従ふといふ譯はない。或時は其業の爲さるゝ道を短くなし給ふ事がある即ち多年を要する業を數週の中に或は一週一日若くは一時間間に爲し給ふ事が出来る。主は何等をも努めず苦しませざる人々をも或は光と恵とに漸的成長をなす時を有たぬ所の人々をも義とし又聖とし給ふ事が出来る。「我物を以て我もふ如く行はよからずやわが善さによりて汝の目あしきか。」(マタイ傳二〇ノ一五)

繰返し繰返し云ひ固め、又聖書の多くの言に由つて證明する必要はあるまい。多くの人が遂に愛に於て全うせらるると云ふ事と、魂の中には神の漸的の働ある事、即一般に云へば、罪が破壊さるゝ迄には随分永き時間と年月とを要する事を我々はみんな知つてゐる。同様に、人が快諾するならば、神はよしと認め給ふまゝに其働の道を短くし給うて、普通多年を要するところの事を、瞬間になし得給ふことをも我々は知つてゐる、神は多くの場合に於て斯くなし給ふ。然し、その瞬間の前後に漸的な御働がある。故に少しも衝突する事なしに或者は漸的であり、或者は即時的であると云ひ得る。

(廿六)パウロは「聖靈に由つて印せらるゝ」と云ふ事は「愛によつて再生する」と云ふ事以上の意味ありとせしか。

一個所哥後一ノ二二にあるやうだが、それほどの意味はない。又弗一ノ十三には其の結ぶ果と證明との二つを含めたる様に見ゆる。即ち初め「愛に於て再生し

義とせられたるものも怒り誇り及私心を感じる

たる」時よりも尙高き程度の經驗を云ひし様である。神は我儕に「希望の確證」を與へて「約束の靈を以て印し給ふ」と云ふ言がある。斯の如く神の凡ての約束を受取るとの確信、即最早疑を抱く餘地なき確信は、聖靈によつて全く潔められ、神の御姿を吾々の心に印したる者である。

(廿七) 斯の如く印せられたる者が如何にして「神の聖靈を歎かしむる」に至るか。パウロが最と細かに注意して居る事は

- (一) 益なき、徳を樹つるに用なき、又聽者に對し恵を與ふるに不適當なる會話。
- (二) 親切のなき、苛酷なる取扱に陥る事。
- (三) 柔和なる心のなき、いつまでも不機嫌なる、怒。
- (四) 怒(早く去るにしても) 互に直ちに許し合ふ心の缺けたる。
- (五) 喧騒或は聲高く叫び荒い劇しき言を以て語る。
- (六) 惡を語りさしやき密告する事又假令柔和なる仕方に於て爲すとも其處に居

らざる人の過を不必要に語る事。此等が聖靈を歎かしむるものである。

倫敦に於ける潔められたる人々に對するウエス

レー氏の見解

(廿八) 近頃倫敦に於て「愛の中に再生せしめられた」と思はれる人に對して如何に考へらるゝか。

彼等の多部分の實驗に於ては甚だ特殊のものがある。信者は先づ愛を以て充たされ、それに由て罪が空しくせらるゝと思はるゝも、彼らはは先づ罪が空しくせられそれに由て愛を以て充たされた。多分其聖業をしてもつと明白にそして打消す事の出来ない様にする爲に、而して義とせられたる状態に於て屢々感ずる所の溢るゝ愛よりも更に明白にそれを區判する爲に神はかく働くのを喜び給うたのであらう。

是は又下の大なる約束に最も合致したるかの如く見える『凡て汝の汚より我は汝を潔めん。新らしき心を汝に與へ。新しき靈を汝の裏に置くべし』(エゼキエル 三六ノ二五、二六)

然し自分はロンドンの彼等が凡て一様であるとは考へぬ。或者と或者との間には廣大なる間隔のある事を知る。最も自分と語つた彼等の多くは高き信仰と愛と喜と平和とを有して居る。自分は彼等の或る者は愛の中に再生され、それに對する直接の證據を有して居る事を信ずる。彼らは其言動に於て前に記したる如き果を結で居る。人は之を何と稱ばうとも是れは自分が完全といふところのものである。

然し或者は多くの愛と平和と喜とを有しても尙ほ聖靈の直接の證を有せぬ者がある。又他の人は其證を有して居ると考へて居るにも拘はらず聖靈の結ぶ果に於て明かに缺けて居るものがある。夫が幾人あるかは自分は云ふまい。或は十人に一人か或は之れよりも多きか少きか、である。然し或者は辛抱強き事と基督教的服従とに確に缺けて居る。彼等は如何なる出來事に於ても神の手の加はつて居る事を見、且つ喜んで之を受くる事をせぬ。彼等は凡ての事に於て感謝せぬ又常に喜ぶ事を爲さぬ。彼等は幸福であらぬ、少くとも常に幸福ではない。何故なら時々咳くからである、彼らは此事彼事が辛いと語る。

或者は柔和に於て缺けて居る。彼等は惡に對して他の頬を廻らす代りに惡に抵抗する。彼等は非難否諫言すらも柔和に受けない。彼等は少くとも憤りの色なしには反對を忍び能はぬ。若しも諫めらるゝか或は反對さるゝ時に假令それが柔和に爲さるゝとも善意を以て解釋しない。彼等は以前に増したる隔りと又遠慮とを以て遇する。彼等が厳しく諫められ或は反對さるゝ時には烈しき言を以て聲高く怒の調子或は鋭き拗ねた仕方にて應へる。彼れ等は他を諫める時に鋭く又荒く語る。又其眼下の者に對して荒らかなる態度を取る。

或者は慈悲に於て缺けて居る。彼等は親切温和親愛優さしと思ひやりと愛とがない、常に其精神其言其容貌態度等行ひの全體の調子に於て。高きも低きも富める者も貧しき者も相手の差別なく殊に道を外れて居る者とか反對者とかを彼等自身の家庭の人々に對してと同様に親切に取扱はぬ。彼等は彼等の周圍に居る人々を幸福にする爲凡ての方法に由つて望み考へ又努めることをしない。其人々の不安の状態を見ても構はない。恐らく彼等は其の人々を斯く不安にしてゐるのであらう。如此場合に彼等は平氣で云ふ、「彼等の不安は當り前の事であつてその當人の過失からである」と。

或者は眞實單純及神の如き至誠を深く念とする忠實と云ふ事に於て缺けて居る。彼等の愛には不純物がある。詐りに似たる或ものが其口に現はれる。粗暴を防ぐ爲に彼等は他の極端に傾く。彼等は圓滑過ぎて阿りに近くなつたり、或は心にもないことを爲る様に思はれる。

或者は謙遜、心の平靜なる事沈着なる事、神經の平靜なる點に缺けて居る。或時は高く或時は低く上り下り其心がよく平均して居らぬ。彼等の愛情も亦適當に調和されてをらぬ。一方に於て餘りに多くを有し一方に於ては餘り小なく即適當に調和して釣合がとれて居らぬ。從て屢々衝突がある。彼等の魂が調子外れである故に眞の調和を作り能はぬ。

或者は節制に於て缺けて居る。彼等は體の健康力及勢力を養ふに最も益ありとして知られ或は知られ得る所の食物の適當な種類を適度に用ふる事に於て注意深くあらぬ。又彼等は睡眠に於て調節して居らぬ。彼れ等は身體と心との爲に最善である所のものを勵んで守らぬ。彼れ等は早く床に就き又早く起きるなどに於て時間を正確にせぬ。身體にも魂の爲にもよくあらぬ所の遅き食事を爲し、斷食又は禁酒などに心を寄せず神につける憂ひ或ひは正義に對する教訓を與へるものよりも寧ろ種々な不節制唯だ眼先の樂みのみ與へる所の教へ、讀書或は會話に

耽る。斯様な喜は潔められたるものではない。それは心十字架にかゝることに傾むきも到達もせぬ。斯様な信仰は神中心のものに非ずして自己中心である。

かくの如く凡ては明白である。自分は卿等が信仰と愛と喜びと平和とを有せらるゝことを信ずる。然し、卿等は銘々自身の状態に就いて承知あると思ふが前に述べし所のものに缺けて居る事である。卿等は辛抱、柔和慈悲忠實謙遜節制の何れかに缺けて居る。今は言の争ひを止めたい。事實に就いては、皆明らかにならぬ。

今卿等は自分が稱ぶ所の完全といふものを有して居らぬ。若し他の人々が其を完全と稱びなければよぶがいゝ。乍併今卿等が有して居る徳は固く保ち、未だ達して居らぬ所のものに向つて熱心に祈らねばならぬ。

愛に於て全うせられたる所の彼等も恵に於て成長するか或は恵から墮落する事がある

(廿九) 完全せる所の人々も恵に成長するか。

疑も無くさうである。只肉體に於てある間のみならず永遠に成長する事が出来る。

(三十) 彼等は恵から墮落する事があるか。

之に就ては實際の事柄が争ふ能はざる者なるを證して居る、前には人罪から救はれたるものは墮落する事が出来ぬと考へて居た、今は反對であることを知る。我々の周圍には完全と稱ぶ所のものを最近實驗したる所のものがある。彼等は聖靈の果と證とを有する。然し今は是等を兩つながら失つて居る。彼等は潔められたる者の有すべき徳に立て居らぬ。が、世には墮落する事を不可能ならしむる程

愛に於て全うせられたる所の彼等も恵に於て成長するか或は恵から墮落する事がある

の高き程度たかていどの完全くわんぜんは無い。若しも人が墮落だらくせぬといふ事ことがあれば夫れそは全く特別とくべつの神かみの約束やくそくに由るものである。

(卅一) 如此かくのごとき状態じょうたいから墮落だらくした所ところの人は夫れそを回復くわいふくする事ことが出来るか。

何故なにゆゑ出来ぬであらうか。其實例じつれいも多くある。全く確實かくじつなる信仰しんかうに達する前まえに度々くわんくわん恵を失ふ事ことは有がちの事である。故に罪つみから救はれたる所ところの彼等かれらを過ちに陥らしむる機会きかいを防ぐ事ことに力を盡さねばならぬ。此精神このせいしんに基き左の忠告ちゆうこくを與へる。然れど、夫れに先ちて潔きよの業わざそれ自身じしんに就て明白めいはくに語る必要ひつたうがある。近頃ちかごろの、潔めきよめの業わざは神かみから來れるもの恐らく地上ちじやうに於ける最大さいだいの者ものと思考する。而も是も亦他の業わざと同じく人の弱點じやくてんが混交こんかうして顯はれる者である。乍併此等しかしなからこれらの弱點じやくてんは我儕われらの考へて居つた處ところよりかは少くある、故に義を愛し義に従ひし所ところの者は喜んで忍んだ筈はずである、中に少數せうすうの弱よわき熱したる頭あたまを持つた所ところの人があつても此聖業このみわざ自身じしんの咎とがではない。如此者かくのごときものがあるからとて嚴肅げんしゆくなる潔きよの標準へうじゆんである所ところの眞面目まじめである

人々の多くを攻撃する根據こんきよとはならない。乍去さりながら反對はんたいは大きい。援けるものは僅かである(援けるこそ當然たうぜんなるに)従て世の多數たすうの人は、他人の間違つた熱心の爲ために信仰しんかうと聖潔せいけつとを求むる事を妨げられて居る。又初めにはよく正しく走つた人でも後には道に外れて居る人もある。

潔められたる人々に對する勸告

(卅二) 第一の勸告は何であるか。

自負心の起らぬ様常に警戒し祈る事。

神が一度自負心を取去り給ひしとするも再び還り來らぬ様に警戒せねばならぬ、自負心は慾望と同様危険に充て居る、思はざる内に滑込む事があらう、殊に自分には危険がないと思つて居る時に來る。凡てわが有てるものは神よりである」と信じてをる時でも自負心が入て來るかも知れぬ。自分の有する考を自分の力だ

潔められたる人々に對する勸告

とせぬにしても若し事實所有せぬものを有すると思ふ時は夫は誇である。例へば
 エル君が自分の有する光は皆神の賜物として居た、是迄は謙遜である、乍去誰よ
 りも多くの光を有して居ると考たとする、是は明白なる自負心である。さて卿等
 の有する凡ての知識は神よりとせらるゝか此點に於ては謙遜である。されど、實
 際有するよりかも多くを有すると考へらるゝならば、或は自分は神より教へらる
 ゝ故に人間から教を受くる必要は無いと考らるゝならば、誇は戸口に立て居る譯
 である。然り卿等は教を受くる必要がある、雷モルガン君、マックスフキールド君、
 又は余と云はず、ロンドンに於ける最も微弱なる教師より受くる必要がある、然り
 凡ての人より教を受けねばならぬ。神は御自身の欲し給ふ所の人を我儕に送り給
 ふからである。故に若し君に忠告し若しくは君を諫むる人がある時にも其人に向
 て、「君は盲者だ、僕を教ふるに足らぬ人である」など云うてはならぬ。若しくは
 「其教は君一家の考で肉的理论である」など云うてはならぬ、唯教へられし事柄

を神の前に平靜に熟考せねばならぬ。

常に記憶すべき事は多大の恩寵必しも多大の光を含むで居らぬ事である。二つ
 は必ずしも伴ふものではない。愛が僅かしかない所にも多大の光が存在するかも
 知れぬと同じに多大の愛が光の僅かしかない所に存する事もあらう。心情は眼より
 も多くの熱を有する者であるけれ共見る事の出来ぬ者である。神は都合よく身體
 の組織を備へ給うた、各部互に助を要して「自分は決して他の世話にあづから
 ぬ」など云へぬ様にされてある。

自身罪より救はれたる人に非ざれば我等を教ふるに足る者はないと想像する事
 は頗る大にして危険なる錯誤である。少しの間も左様な事を考へてはならぬ。是
 が卿を多くの又回復する事の出来ぬ誤に導くであらう。

前世紀の狂者が語つた様に權威は恩寵の上に建てられてはゐない。「主にありて
 汝の上にある人」には從順にして尊敬を表せねばならぬ、自分は彼れ等より多

潔められたる人々に對する勸告

くを知つて居ると思つてはならぬ。先方の立場と又自分の立場とをよく知らねばならぬ。常に記憶すべき事は多大の愛、必しも多大の光を有せぬと云ふことである。

此事に注意せぬ爲に或人は多くの過誤に陥つた。少くとも誇と見える處へ陥つた實に警戒すべきは外見と事實と伴はしむる事である。人は「キリスト・イエスにある謙遜を其衷に保たねばならぬ。」同時に「謙遜を着」ねばならぬ、即ち唯夫を内に充たすのみならず、蓋はれ包まれねばならぬ。謙遜と遠慮とが凡て我儕の言動に現はれねばならぬ。凡て汝の會話又行爲をして汝自身の眼にも小さく、卑く、貧弱で、價なき者である事を示すがよい。

其一例として、自分が陥つて居た誤があつたならば何時でも責任を負ふ心備がなければならぬ。考に於て、言に於て、又行に於て誤て居たならば、夫を承認するに少しも躊躇してはならぬ。又斯くする事が神の道を損ふなど、夢にも思つてはならぬ。それは反對に神の道を進める事になる。故に人から非難を受けた時には開放的で淡泊なるを要する、言葉をごまかしたり假托したりしてはならぬ、唯有の儘に現はすならば夫は福音を妨げる事なく反て飾る事になる。

(卅三) 第貳の勸告は何であるか、

自負心の娘である狂熱を警戒せねばならぬ。出來得る丈夫れから遠ざからねばならぬ。餘り熱した想像を有てはならぬ。事を躁急に神に歸してはならぬ。夢、聲、印象、幻乃至啓示を輕々しく神よりの者と決定してはならぬ。是等は神よりかも知れぬ。或は自然よりかも知れぬ。若くは悪魔よりかも知れぬ。故に「凡ての靈を信ずる勿れ」とある。「唯其靈神より出るや否を試むべし」とある。萬事は聖書に照して決すべきであつて何者も其前に叩頭せしめねばならぬ。少しでも聖書から離るゝ時は常に狂熱に傾く危険がある。(即ち前後の關係より見るべき聖句の明白なる文字通の意味から離るゝ時は、その危険がある。道理、智識、若くは人

の研究を賤み又輕んじることと同様である。是等の凡ては神の優れたる賜物であつて最も尊い目的の爲に役立ち得る者である。

言語、智慧、理性又は知識を決して非難に用ひぬ様勸告する。反て、是等の者に益々富む事を祈るがよい。若し夫が世俗的智慧、無用の知識又誤れる理論であるならば明にさういふがよい。而して穀を棄去るはよいが麥を捨てぬ様にせねばならない。

狂熱に入る普通の途は、方法を無視して直に目的を執へ様とする事である。例へば知識を求むるに、聖書を調べも神の子達に相談もせず或は靈的力を得ん爲に續けて祈らず、忠實なる警戒を爲させぬ如き、將又恵を求むる爲に必要なる凡ての機會を用ひて神の聖言を聞かうとせざる如きである。

或人はサタンの此計畫を知らない。彼等は聖書を調べる事を忘れた。彼等は「神は凡て聖書を我心に記し給ふ。故に讀む必要はない」と云ふ。又他の者は、ソナに多く聽く必要はないと言つて朝の説教會に出席する事を怠る。此の様な有様に居る人は警戒をせねばならぬ。如此人は門外漢の聲に従たのである。「聖徒に一度與へられた」善き舊き道を歩んで速くキリストにとび還らねばならぬ。此道は神を知らぬ人々も證して、「基督教徒は朝早く起て神としてのキリストに讃歌を捧ぐ」と云ひし古い道である。

「恩寵に成長」したいと云ふ希望其物が或時は狂熱に導く導火となる事がある。常に新しき恩寵を求むるよりして不知不識の間に神と人とに對する愛の新しき者を求むる外更に違た新らしき者を求める様になる。斯して神の賜物なる新しき心を得た後、不確實に左に記する様な新しい賜物を求め得たと想像するのである。

(一) 我は全心を盡して神を愛せり。

(二) 全靈を以て。

(三) 全力を以て。

潔められたる人々に對する勸告

- (四) 神と一となれり。
 - (五) キリストと一となれり。
 - (六) 我が生命キリストと共に神の内に隠れあり。
 - (七) キリストと共に死せり。
 - (八) 彼と共に甦生れり。
 - (九) 彼と共に天の聖所に座せり。
 - (十) 主の玉座に達した。
 - (十一) 新しいエルサレムに到れり。
 - (十二) 神の殿、人の間に降下るを見たり。
 - (十三) 凡ての働に對して死せる者。
 - (十四) 死も苦も悲も誘惑も來り襲ひ得ぬ人となれり等である。
- 是等の誤謬に陥る多くの人の共通の根柢は此等の聖句を新らしく強く心に悟つ

た時新しい種類の賜物と思ふことである。是等の聖句の幾つかは義とせられし時成就する者もあり又潔められて初めて成就する者があることを知らないのである。たゞ一層高い程度で實驗しなければならぬだけである。我らの期待すべきものは是丈である。

今一つ是等及其他の多くの誤謬の素地となる者は左の事に就て深く考慮せぬ事である、即ち謙遜にしてに柔和に忍耐、深き愛は神より賜はる最高の賜であること凡ての幻黙示、啓示などは愛に比すれば小なる者なる事、又上に列記したる賜も愛に比しては漸く同等と云へるか又は遙かに低級なる者なる事を知らぬ事である。

よくよく知らなければならぬ事は諸天の天は愛である事である。宗教の中には是より高き者はない、つまる所、是より外なき者である。愛より外の者に目を注いで居るなれば夫は標的を外れたる者又公道の外を歩む者である。或人に尋ねて君

潔められたる人々に對する勸告

は是々の恵を受けられしやと云ふ時に愛より外の事を意味するならば夫は誤である、道を外れて他に導きつゝある者又誤れる指導を人に與ふるものである。従て心に確く定むべき一事は是である、即ち神が凡ての罪より救ひ賜ひし瞬間より哥林多前書十三章に記載されたる愛に漸次成長するより以外何物をもめがけてはならぬ。アブラハムの懷に運ばるゝ迄は是以上高く行く事は出来ぬ。繰返して云ふが、狂熱に就いて警戒せねばならぬ。夫れは豫言の賜若しくは靈を辨ふる力を受け得たと想像する如きことである、卿等の内誰れ一人之を有する者があるとも、あつたとも余は信じない。自分独自の感情で人を批判してはならぬ。是れは聖書的ではない。どこまでも「律法と證言」に準據して居らねばならぬ。

(卅四) 第三の勸告は何であるか。

律法無用論者に氣を付けねばならぬ、彼れ等は「信仰に依て」律法を棄てる」

或は一部を棄てると云ふ一派である。狂熱者は自然に是に導かるゝ。この二つは離れにくいものである。これは警戒しても爲盡せぬ程幾多の形式に於て人の内に潜入せんとする者である。主義に於ても實行に於ても少しも其の傾向あるものに對しては警戒せねばならぬ。「キリストは法律の終なり」と云ふ大眞理さへも若しも主は凡ての道徳律を容れて之を愛の律法に移し入れ給うたのである事を考へて居らぬならば我儕を迷はす事がある。自分は愛に充たされて居るから最早潔めらるゝ事を要せぬとか、又自分は常に祈して居るから別段祈禱の爲に時を定むるの必要はないとか、或は自分は常に警戒して居るから特別に自己省察などする必要はないなど云うてはならぬ。律法即總て記されたる言を尊み敬ねばならぬ。「神よ私は主の戒を黄金よりも玉よりも尊む。如何に私は主の律法を愛するよ、今日我勉め學ばんとする所は是である」といふのが我らの聲であらねばならぬ。律法無用説の書籍にては殊にクリスプ博士及サルトマーシユ氏の著書を警戒せねばなら

ぬ。彼等の書中には多くの優れたる事項を含蓄して居る、是が一層危険の程度を強くする。誤に陥らぬ前に警戒して居らねばならぬ。火を弄んではならぬ。まじしの穴（イザヤ十一〇八）に手を入れてはならぬ。頑迷を警戒せねばならぬ。卿等の愛或は美行を所謂唯メソヂスト教徒にのみとか、殊に愛の内に魅されたと云ふ極めて僅少の人々の間にのみとか或は互に其言を信じ合ふ交の人々の間にのみ限てはならぬ。又是が一の符牒となつてはならぬ。自分の働を悪い意味に於て止める所の静止を警戒せねばならぬ。多くの事例の中から一を擧ぐれば、或る人が卿に教へて「君は大なる恵を受けられた。乍去其事を人に話したり、其外此の事彼の事を爲さつたので恵を失つて了はれた、静かにして居ればよかたに」と言ふが如きがそれである。

我が儘なる放縱生活を警戒せねばならぬ。殊に夫を一種の徳の如く心得て克己する事や、十字架を負ふ事或は斷食節制等を嗤笑する等の事があつてはならぬ。

批評好になつてはならぬ。何事でも自分に反對する人の事を批評して、イヤ盲目だの、死で居るだの、墮落者だの、或は働の敵など考へたり、稱んだりしてはならぬ。今一度注意するが唯信仰説（唯だ信仰あれば救はるゝと言ふ）に警戒せねばならぬ、彼等は唯だ信仰せよ信仰せよ叫ぶばかりで、もつと聖書的に語る人を無知だとか律法主義だとか云つて咎める。或相當の時期に於て唯だ悔改を勧めるとか、信仰のみを教へるとか、或は全然完聖を説く事は相當の事であるが一般に於て我等は神の全體の御計畫を宣言し信仰の原理より推して教へねばならぬ。聖書は正義に就て總體的に各部分に微細なる枝葉に渡りてまで取扱てある、即ち端正なる事、禮讓ある事、勤勉なる事、忍耐する事、凡ての人を尊敬する事等に至る迄書いてある。これと同じく聖靈は我等の心の内に細かく働いて下さる、唯一般に潔を望む希望を造つて下さるのみならず、凡ての個々の恵みに我儕を強く引き付け「凡て愛すべき事」のあらゆる部分に導き給ふ。是に多大の注意をせねば

ならぬ、「行ひに依て信仰が全う」さるゝ如く是に依て又信仰の業を完成もし破壊もする、神の御恩寵を悦ぶも御不興に預るも我儕の従順不従順の微細なる一言一行に由る事を承知せねばならぬ。

(卅五) 第四の勸告は何であるか。

怠の罪を警戒せねばならぬ。凡ての種類(しゆるる)の善を行ふ機会を失うてはならぬ。善事に熱心し、宗教の事でも慈善の事でも心から爲すべき仕事を欠てはならぬ、力の限り人の體と魂との爲に善を爲すに努むべし。特に「必ず汝の隣人を戒むべし、彼が故によりて罪を受くるなかれ。」活動せよ。懶惰や無精に所を得させてはならぬ。汝は怠て居ると人に云はるる様な機会を興へてはならぬ、多くの人がソナ批評をする時は汝の全靈及全行動をして其の誹謗に對する辯解者たらしめねばならぬ。隙なく仕事をするがよい、時間の斷片を失はぬ様にし、細片を收集して手落なき様せねばならぬ。何事でも仕事をする事があつたら全力を盡して爲せ。

「語るに遅く、」話すに細心であれ。「言多ければ罪なきこと能はず」。多く語るな、又一時に長く語るな。少人數で一時間以上最も有益な會話をなし得る者は少ない。信心家らしきお諛言、宗教的駄語を遠けよ。

(卅六) 第五の勸告は何であるか。

神以外の者を望む事に就て警戒せねばならぬ。卿は今何もの外(ほか)の者を望まれぬか、凡て外の望は追放し盡してあるか、然らば再び入り來らぬ様注意を要する。「自ら守て潔くせよ。」「眼を隙に」せよ、然らば全身も亦明なるべし。食欲とか其他の肉慾を悦ばす事を許してはならぬ、眼或は想像力を喜ばせる爲に立派な事新しき事或は美しい者を求めてはならぬ。金錢、譽れ、尊敬或は凡て被造物よりの幸福を求めてはならぬ。斯る物に對する欲望が歸來する事があつても卿等には必要のない者、最早要用を感じぬ者と確定して置かねばならぬ、キリストが君を自由に爲し給へる其の自由の立場に確實に立て。

潔められたる人々に對する勸告

克己する事と日々十字架を負ふ事とに就ては凡ての人々に手本となれ。卿は如何なる快樂でも自分を神に近づけぬ様な者は一切念とせず又自分を神に近づける者ならば如何なる苦も厭はない事、何事を行ふにも又苦しみにも唯單に神を悦ばす事を目的とせること、快樂、苦痛、名譽、不名譽、富貴或は貧困に就て、卿の心の言葉は『もしわが主に在りて生きかつ死に爲なば我にはすべてよし』なることを人々に示すがよい。

(卅七)第六の勸告は何であるか。

分派、キリストの教を分裂さす處の分派を立てる事を警戒せねばならぬ。内心の分離即會友互に相愛する事を止むる事(哥前十二ノ廿五)は、凡ての争、即外に現はるゝ分離の根である。凡て斯如き傾向を警戒せねばならぬ。分派心を警しめ其傾向ある者は小さき事でも避けねばならぬ。故に「我はパウロ、我はアポロに屬」と云てはならぬ。此の事實がコリントに於ける分派を造つた。「是は我が説

教者で英國中で一番良い説教者だ、彼の人を此方へ呉るならば外の人々は皆持つて行つてもよい」など云つてはならぬ。凡て如斯事柄が分派心を養成し形成し、神の結び給ひし者を分離するに至る。決して如何な説教者でも見下したり卑しめたりしてはならぬ、或一人の人を他の人以上に上げてはならぬ、然らざれば其の人と神の道との兩方を害する事となる。同時に物の言ひ方が不徹底とか又は不明了であるとかの理由で又假令誤あるとも其誤に對して待遇を過てはならぬ。

斯様に卿等が若しも分派を防がうと思ふならば良心よりして其の社會、其の團體の凡ての規律を守らねばならぬ。決して屬する所の組或は團體の集會に缺席したり其他公開の集會に不參をしてはならぬ。この事が我儕の社會の大切なる筋骨である、此等を我らが重んずる心や、集會に嚴正に出席することを弱め、或は弱むる傾向のあるものはことごとく我儕の團體の根柢を覆さんとするものである。或人が云ふ毎週の祈禱會、内省、特別なる勸め等は説教されたる聖句から受けし

所の恵を深くし又確實にし其公會に出席する事の出来なかつた人々に恵を傳へる所の大なる方法である。故に此等の宗教的連鎖或は交際なしには如何なる熱心の試みも唯説教する事のみには依ては永續的の効がない。

假令意見を異にするからとも兄弟から離れると云ふ考を以てはならぬ、汝を信ぜぬ故に、或は其の言に従はぬ故に、其の人が罪を犯すと夢にも思つてはならぬ、或は此の説は働きに對して絶對に必要であるが故に共に立つか亡びるかであらねばならぬ様に考へてはならぬ。反對家に對して性急なる事を警戒せねばならぬ。事の大小に拘らず汝に反對したる見解を有する人とか、或は反對する事が其の人の義務である如く考へて居る人があるとも酷な考へ様をしてはならぬ。自分は我等の或者は我等の主張せし所に人が反對したと言ふ爲に其の人に就て酷な考へ様をしたかと恐れてゐる。凡て此等の事柄は分離に傾く、斯くの如き事柄に依て我等に己の事に就ては他の人々に悪い教訓を示しつゝある事となる。

る。

短氣なる事或は癩僻なる事を警戒せねばならぬ、人に話しをさせないとか、僅かな言に氣を荒げたり、自身の言ふ事或は人の言ふ事を其儘に受けぬとて其人より逃げたりする事を注意せねばならぬ。

雑多な種類の十字架と共に衝突と反對とを期待するがよい。パウロの言「キリストの爲に賜ひたればなり」を考へよ。主の爲に、主の死と汝等の爲の仲保の結果として「唯信する事のみならず、彼の爲に又苦しむ事をも賜ひたればなり」(ピリピ一ノ二九)「賜ひたればなり」神は汝に此の反對或は非難を興へ給ふ。それは彼の愛の新しき印である。然るに汝は其興へ主を非認し、或は其賜を蹴り飛ばして夫れを不幸と呼ぶであらうか、寧ろ「父よ時至りぬ汝の榮を顯し給へ今汝は汝の子に汝の爲に苦しむ物を興へ給へり、聖意を吾等に爲し給へ」と云ふはないであらうか、此等の事は神の働又汝自身の魂の妨げにもならず、汝自身の潔められたる人々に對する勸告

過あやまちによらざる限り攝理せつりの道みちに於て避け難がたきことなるのみならず、有益いよきの事ことにして寧ろ汝なんぢの爲ために必用ひつような事ことを認めよ。故ゆゑに其それを神かみからのものとして好意かういと感謝かんしゃとを以て受け取るがよい（偶然ぐぜんよりとせず）。謙遜けんそんと柔和にやわと服従ふくじゆうと親切しんせつと快活くわいかつとを以て人ひとから受取るがよい。何故なにゆゑ此等これらの問題もんたいの起る時ときに汝なんぢの容貌ようぼう又態度たいどが柔やはらかくあらぬであらうか。レデイ・カツツの性格せいかくを考へたい。夫それは斯かうである。「嘗て羅馬帝ろうまていのテトスに就て言はれてある事は誰たれでも彼かれに逢て不愉快ふゆくわいな氣きもちになつて歸つた者は決してないとの事であるがカツツに就て言はれてある事は誰たれでも未だ彼女かれに不愉快ふゆくわいな氣きもちで行た者がないと云ふことゝ、面會者めんくわいしやはみんな彼女かれから親切しんせつな快くわいい歡迎くわんげいを必ず受けることを知つてゐたからである。」

他人たにんが汝なんぢから離れ行く様に誘惑いさむくする事を警戒けいけいせねばならぬ。避け得る丈だけは人の感情かんじやうを害がいせぬ様にせねばならぬ、汝なんぢの凡ての事に於ける行動かうどうが汝なんぢの職業しよくげふに對して所を得てゐて我儕われらの救主すくひなしなる神かみの教をしへを飾る所ところのものなる様注意やうちういせねばならぬ。殊こと

自分じぶんのことを話す時に注意ちういせねばならぬ。勿論もちろん神かみより受けし惠めぐみの御業みわざを否む事は出来ぬ、然し其の事に就て人に尋らるゝ時は最も感情かんじやうを害がいせざる方法はうほうに於て語らねばならぬ。凡て華麗くわいれいなる又誇大こぼだいなる言を避けるがよい、勿論もちろん完全くわんぜんとか聖せい潔けつとが第二だいにの惠めぐみとか或は成就じゆうじゆしたとか言ふ事を用ひるには及ばぬ。然し寧ろ神かみが汝なんぢに爲し給ひし所の委曲ゐまじやくを其の儘まま語るべきである。「かくくの時に自分には言ひ表はす事の出来ぬ變化へんくわを感じた、其の時以來誇、自己心じこしん、又怒またいかり、不信仰ふしんかう、唯だ神かみと凡ての人に對する愛あいに充たさるゝ事の外何ものも感ぜぬ者となつた」と言つてもよい、そして其の他明白ためいぱくな質問しつもんに對しては謙遜けんそんと單純たんじゆんとを以て答へるがよい。

若も汝なんぢが何時いつか今ある所ところの状態じやうたいから墮落だらくして誇ほこりか或は不信仰ふしんかうか、嘗て取去とりさられてありし或性僻あるせいへきを感じずるならば汝なんぢの魂たましひの危険きけんを冒しても夫れを隠さず拒まず飾らぬがよい。何事なにことは扱さておいても信用しんようある人の許もとに行きて有の儘ままの状態じやうたいに就て語るが

潔められたる人々に對する勸告

よい。然らば神は適當なる言を其人に與へて君の魂に健康を與へて下さる。斯して確かに主は君の頭を擡げ起して碎けし骨を喜ばせて下さる。

(卅八)最後の勸告は何であるか。

我儕は凡ての事に於て人の模範たるべき事殊に外容に於て(服装の如き)、小さな事に於て、金錢の貯蓄の如きに於ても(凡の不必要なる費用を省く事)、又深厚にして健實なる眞實さに於て、凡ての會話には堅實にして有益なる事に於て。凡て此等の點に於て君等は「暗黒の中の燈光」であらねばならぬ。斯くてこそ日々恵みに成長し「主イエス・キリストの永遠國に入るの恩を豊かに予へ給ふべし。」

前記の警告の大意は再び左記感想の中に力説してある故に聖書に次いで此等の諸點を深き注意と熟慮とを以て屢々考案されん事を希望す。

(一) 海は、吾人が神に充たさるゝ事と又恵の聖靈に充たさるゝ事との良き表象である。凡ての河が海に還る如く肉體も靈魂も義の善業も、主の永遠の安息に生きる爲めに神に還り往くのである。

凡て神の恵は唯御慈悲による賜物である、とはいへ主が一般に喜んで人を恵むの道として其御考に入れ給ふ所のものは我儕と共にある所の友の祈禱教養及潔きである。眼に見えずとはいへ強き引力を以て、神は是等の人々の交を通して、或人々の魂を御自身に引き付け給ふのである。

恵より出でたる同情は自然より出るものに遙に優る。

眞實に敬虔なる人々は愛情が偽の愛よりと等しく自然に眞の愛より出づることを示す、彼らは神の名に因て愛する友の善と惡との事情に就て深く又鋭く感ずる。但し是は誠に愛の言を了解する所の人々に依てのみ會得さるゝものである。

人は外部に多くの困難があるとも其魂の奥底に於ては平和である事が出来る、
恰も海の表面は烈しく動かさるゝとも其底は静かであるが如くである。

人が恵に成長することの最も良き助は我儕の上に落ち来る所の虐待、侮辱及損
害等である。故に他の何物にも優りて夫れ等を望むが如くに、凡て感謝を以て此
等を受くべきである。其れらのものは我ら自身が招いたものでない限り。

苦痛から逃るゝ最も容易の道は神の思召に従ひ又それが續く丈け長く喜んで忍
ぶ事である。

若し我等が正しき態度を以て迫害と苦難とを忍ぶならば、單に主の慈悲を模倣
して多くの善業を行ふよりも如斯經驗の一つを正しく用ひる方がずつと我らをし
てキリストに似させるものである。

神が其愛するものに對する愛の證據の一つは苦難と其苦難を凌ぎ得る恵とを遣
り給ふことである。故に我儕は最大なる苦難の中にあるとも、主の聖手より其を

受けくることに於て我儕を愛し給ひ我儕が愛しまつる主から苦を興へらるゝ事
苦痛の中にあつて尙喜を感じることを神に證せねばならぬ。

神が人を彼自身に引付け給ふ所の最も容易なる道は其人が最も愛してゐるとこ
ろに道理があつて、苦痛を興へ給ふ事である、又單一なる心を以て爲しし善き業
から起る所の苦痛に遭遇せしむる事である。是は此世に於て最も愛すべき又望む
べきものさへも實は空しきものなる事を明白に示さるのである。

(二) 誠の服従は總て世界の全事相(罪を除き)を經營し司配爲給ふ神の全意志
に全然一致する事である。これが爲我らはたゞ善きも悪きも凡ての事聖旨として
受けなければならぬ。

天若くは地より到來する所の最大なる苦難に於ても、正しき者は平和の中に動
かず其魂の凡ての力を神を愛するの愛を以て統一し全然神に服従するのである。
如何なるものが我等の上に落つるとも我等は静かに忍ぶべきである。自他の缺

潔められたる人々に對する勸告

點を忍び密室の祈禱或は云ひ難きの嘆を以て神に訴へねばならぬ。然し決して鋭き言を以て語てはならぬ、不平を云ひ、咄く事なく只神の満足し給ふ方法に於て取扱ひ給ふ儘に全然服従すべきである。我儕は主の小羔である、故に常に死に至るまでも咄く事なく忍ぶ覺悟あるべきである、我々が矯し能はぬ人々を忍び神に彼等を捧ぐる事を以て満足せねばならぬ。

是が眞の服従である。主は我儕の懦弱を負ひ給ひし故に我儕も亦主の故に互の懦弱を負はねばならぬ。

主の生れ給ひしベツレヘムに、或は打れ給ひし廊下に、更に十字架の上に死を遂げ給ひしカルバリ山に從はん爲自己を赤裸にし凡ての自己心を剝で從ふ事は大なる恵である、是は神の子に於ける信仰に由るほかこの事もこれを知ることにも與へられないのである。

(三) 人は忍耐なくしては神に對する所の愛はない。又謙遜と柔和の精神なくしては忍耐もない、謙遜と忍耐とは愛の成長の確證である。謙遜のみ忍耐と愛とを結合せしむる事が出来る、之無くては苦痛より利益を得る事、又故なくして人々が我々を苦ましむる時に、咄きを防ぐことは不可能である。眞の謙遜は自己寂滅の一種である、之れが凡ての徳の中心である。

神に還れる魂は救に就て告げらるる凡ての點に益を得んと欲して注意せよ。

神が赦し給ひし罪に就ては、我等の心には唯深き謙遜の、我等の言、行動及苦痛には一層嚴格なる規範のほか何物も留るべきでない。

(四) 人を忍ぶ事、温和と沈黙との中に惡を忍ぶ事は基督者生活の總和である。神こそ我儕の愛の第一目的である、愛の第二のつとめは他人の缺點を忍ぶ事である、我儕は此事を我等の家庭に於て先づ實行せねばならぬ。

主として愛を我儕の思考、情想、知識或は我儕が己の欲する如く他をも有徳な

潔められたる人々に對する勸告

らしめんとの念願を遮り碎かんとする人々に向て働かせねばならぬ。

(五) 神は恵の中に建設し給ひし人々に對してさへも彼等が凡ての場合に祈り然も度々祈るに非れば聖靈をあまり與へ給はぬ。

神は祈りの答としてに非ざれば何事も爲し給はぬ。悔改めて神に導かれし人々自らこの爲祈らなかつても(斯る例は稀なるが)誰か外の人が其人の爲に祈りし結果である。靈魂が得る所の凡ての新らしき勝利は、新らしき祈りの結果である。

凡ての不安の場合に於て我等は密に祈るべきである、即ち神の恵と光とが來りて我儕に充ち給はん爲めに祈る、斯くて後其結果が如何にあるとも苦みなくして確信に到達することが出来る。

大なる誘惑に於ては、信賴と平靜とを以て唯一目主を仰ぎ見る事と其名を稱へる事だけで惡に充分打勝つことが出来る。

神の「絶えず祈るべし」との命令は、我魂の中に神の生命を湛へ得る恵に與かる必要に基いてある、肉體が空氣なくして生活し能はぬ如く、魂も神の恵なくしては一瞬時も支へ能はぬ。

神に就て考へるも、神に語るも又主の爲に働くも、苦しむにも、若し我儕が彼に對する愛の外他に目的なく又彼を喜ばし奉る願の外何者もなき時は、凡ては祈りである。

基督者が爲す凡ての事、食ふにも、眠るにも、單純に神の命に従ひ、其命に對しては自分の考を加減する事なく、遵奉する時は其が祈りである。

理解力は外界の事柄の爲に用ひらるゝも、祈禱は心情の希望に依て續けらるゝのである。

愛を以て充たされたる靈魂の中には神を喜ばし奉らうとするの願がある。是は永續的祈禱である。